

大東市埋蔵文化財調査報告第14集

メノコ遺跡発掘調査報告書

1998年3月

大東市教育委員会

序 文

大東市は、大阪府の東部にあって河内平野のほぼ中央に位置し、東には生駒山系が南北に連なっています。原始・古代におきましては、河内湾、河内潟、河内湖などの縁辺部にあたり、また瀬戸内海の東端という地理的背景から、さまざまな文化伝来の拠点となる地域であったことと思われます。当然、そこには当時の人々の活発な活動があり、様々な社会を形成していたことは明らかであり、そしてその痕跡が現在遺跡として残されています。

遺跡は我々祖先の生活の痕跡であり、そのさまざまな遺産からは学ぶべきことがたくさんあります。21世紀を目前にして、今後どのような社会にしていくかを考える時、新ためて過去の歴史を振り返ることも一つの方法であると思われます。

今回、刊行の運びとなりました本書におきましては古墳時代から奈良時代にいたる人々の生活の跡、当時使用されていた土器などの生活用具が多数出土しました。特に、韓式系土器、陶質土器と呼ばれる朝鮮半島系の土器や、また当時百濟という国で作られていたと思われる土器が出土するなど、半島との交流が頻繁であったことが推測され、当時の社会情勢を知る上で貴重な成果を得ることができました。

これらの成果につきましては、当時のより一層の歴史的解明を目指すことはもちろんのこと、今後の社会にどのように反映させていくかが私共に課せられた責務であると考えています。そして、この報告書をさらに本市の歴史や文化を学ぶための一助としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施、また報告書作成にあたりご協力を賜りました土地所有者ならびに地元の方々、関係機関、関係各位に厚くお礼申し上げます。

また、市民の皆様方におかれましては今後とも本市の文化財保護行政にご理解、ご協力賜わりますようよろしくお願い申し上げます。

平成10年3月

大東市教育委員会
教育長 北本慶三

例　　言

1. 本書は、大阪府大東市野崎に所在するメノコ遺跡の発掘調査（MNK91-1）報告書である。
2. 発掘調査は社員寮建設に伴うもので、大東市教育委員会がフジキュウ服装株式会社より委託を受け、平成3年6月24日から同年8月20日にかけて実施した。
3. 発掘調査及び整理作業は、大東市教育委員会歴史民俗資料館、中達健一が担当した。
4. 発掘調査に係る費用についてはフジキュウ服装株式会社がこれを負担した。記して感謝の意を表する。
5. 調査及び報告書作成にあたっては、下記の諸氏より御指導、御教示を賜った。記して感謝の意を表する。（順不同・敬称略）
向井清（元大東市文化財保護委員）、田代克己（帝塚山短期大学）、三好孝一（助大阪府文化財調査研究センター）、田中清美（助大阪市文化財協会）、岩瀬透・阿部幸一（大阪府教育委員会）、十河良和（堺市立埋蔵文化財センター）、朴天秀、塙山則之・濱田延充（寝屋川市教育委員会）、宮野淳一・宮崎泰史（大阪府立弥生文化博物館）、鍋島隆宏（太子町立竹内街道歴史資料館）、野島稔（四条畷市教育委員会）、樽野博幸・川端清司（大阪市立自然史博物館）、永島暉臣慎氏を代表とする韓式系土器研究会の諸氏、阿南辰秀（阿南写真工房）
6. 現地調査、整理作業等にあたっては下記の諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表する。

（五十音順・敬称略）

岩上直子、大谷聰、甲斐範浩、川崎昌美、北田享子、木村奈江美
小堀直子、谷崎光子、萩野登、樋口里美、古川佳和、松岡美佳子
宮田八重子、村尾奈津子、森石千枝子、森潤子、吉野正泰

7. 本書の執筆、編集は中達が行った。
8. 調査において作成した写真、実測図、カラースライド等は大東市立歴史民俗資料館に保管されている。広く利用されることを希望する。

本文目次

序 文

例 言

I. 調査に至る経過	1
II. 位置と環境	2
III. 調査方法	4
IV. 調査成果	
1. 基本層序	4
2. 遺 構	
(1) 第1遺構面	6
(2) 第2遺構面	9
3. 遺 物	
(1) 土 器 類	15
(2) 土 製 品	27
(3) 墓 輪	29
(4) 木 製 品	29
(5) 石 製 品	30
(6) 金 属 製 品	30
(7) 動物遺体	30
V. まとめ	
1. 遺 構	32
2. 遺 物	32

挿図目次

第1図 調査地位置図	1
第2図 市内遺跡分布図	3
第3図 調査区区割図	4
第4図 調査区土層断面図	5
第5図 SD-101断面図	6
第6図 SD-102断面図	6
第7図 第1遺構面全体図	7
第8図 SB-101平面図・断面図	8
第9図 SB-102平面図・断面図	8
第10図 SP-103遺物出土状況図	8
第11図 SP-106遺物出土状況図	8
第12図 第4層遺物出土状況図	9

第13図 第2遺構面全体図	10
第14図 SD-202遺物出土状況図	11
第15図 SK-201遺物出土状況図	11
第16図 SE-201遺物出土状況図・断面図	12
第17図 SI-201遺物出土状況図	12
第18図 SD-201、SX-201遺物出土状況図(北側部分)	13
第19図 SD-201、SX-201遺物出土状況図(南側部分)	14
第20図 土器実測図(1)	18
第21図 土器実測図(2)	19
第22図 土器実測図(3)	20
第23図 土器実測図(4)	21
第24図 土器実測図(5)	22
第25図 土器実測図(6)	23
第26図 土器実測図(7)	24
第27図 土器実測図(8)	25
第28図 土器実測図(9)	26
第29図 韓式系軟質土器実測図・拓影	27
第30図 韩式系陶質土器拓影	28
第31図 土製品実測図	29
第32図 増輪実測図・拓影	30
第33図 木製品実測図	31
第34図 石製品実測図、金属製品拓影	31

表 目 次

第1表 第1遺構面ピット計測表	9
第2表 第2遺構面ピット計測表	14

図 版 目 次

図版1 第1遺構面北東部(北西より)・第1遺構面南西部(北東より)	
図版2 SD-101(北より)・SD-101断面(南より)・SD-102(北より) SP-103遺物出土状況(南より)・SP-106遺物出土状況(南より)	
図版3 SB-101(西より)・SB-102(西より) 第4層遺物出土状況(弥生土器 壺)・同左(須恵器 壺)	
図版4 第2遺構面南部(北より)・SK-201(南東より)・SE-201(南より)	
図版5 SE-201完掘状況(西より)・同 SE-201遺物出土状況(東より) 同 S E-201遺物出土状況(西より)・S I-201遺物出土状況(北より)	

- 図版6 SD-201、SX-201（北東より）・SD-201（北より）
SD-201、SX-201遺物出土状況（北東より）・SD-201大甕出土状況（北東より）
- 図版7 SD-201各遺物出土状況・SX-201各遺物出土状況
- 図版8 出土遺物(1)
- 図版9 出土遺物(2)
- 図版10 出土遺物(3)
- 図版11 出土遺物(4)
- 図版12 出土遺物(5)
- 図版13 出土遺物(6)
- 図版14 出土遺物(7)
- 図版15 出土遺物(8)
- 図版16 出土遺物(9)
- 図版17 出土遺物(10)

I. 調査に至る経過

野崎3丁目350-1において、RC3階建の社員寮建築の計画がなされた。当該地はメノコ遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）にあたるため、埋蔵文化財窓口である歴史民俗資料館では事業主に対して文化財保護法第57条の2第1項にもとづく文化庁長官宛届出をおこなうように指導した。

計画地における遺跡の範囲確認調査を文化庁の指導による大阪府（教委文第1-6728号）通知にもとづき、大東市教育委員会が平成3年6月5日に行ったところ、古墳時代の土師器、須恵器等が出土し、遺跡が今回の計画範囲内に含まれることが確認された。

この調査結果にもとづいて、事業主、工事関係主体者との間で遺構、遺物の保存について種々協議を重ねたが、計画の変更是困難であることから記録保存を目的とする発掘調査を実施することになった。

結果、事業主より大東市教育委員会が委託を受け、文化財保護法第98条の2第1項に基づく、平成3年6月15日付通知（大東教委歴284）により発掘調査を実施した。

現地発掘調査は平成3年6月24日に着手し、同年8月20日に完了した。整理作業は現地調査終了後、大東市立歴史民俗資料館において行い、平成9年度をもって終了し、書の刊行をもって発掘調査事業のすべてが完了したものである。

また、調査の実施にあたってはフジキュウ服装株式会社より深甚なるご理解とご協力を賜り、ここに明記して感謝の意を表したい。



第1図 調査地位置図

II. 位置と環境

メノコ遺跡は大阪府大東市野崎3丁目周辺にかけて所在し、東西約100m、南北約150mの広がりをもつと推定されている遺跡である。これまで石鏃の他に古墳時代の土師器、須恵器、埴輪片などが採集されていたことから古墳時代の散布地として周知され、また古墳の存在をも指摘されていたが本格的な発掘調査の機会もなく、詳細な内容については明らかにされていない遺跡であった。

地理的には生駒山地から派生する谷田川などの中小河川により形成された扇状地の扇端部から沖積地にかけて立地しており、今回の調査地はほぼその境に位置している。以下、周辺の遺跡を中心に歴史的推移を概観する。

旧石器時代の遺跡は今のところ確認されていないが、旧石器時代終末から縄文時代早期にかけて使用されたと考えられている有舌尖頭器が北条遺跡、宮谷古墳群で出土、採集されている。

縄文時代においても北新町遺跡、城ヶ谷遺跡、鍋田川遺跡などで中～晚期の土器が出土しており、遺跡の存在は推定されてきたが、中垣内遺跡での最近の調査で市域において初めて北白川C式の深鉢を伴う中期後半の遺構が確認されており、今後の調査に期待されるところである。

弥生時代の遺跡では、中垣内遺跡で前～中期の集落跡、北条西遺跡においても集落に伴うであろうと思われる前期の溝、土坑が検出されており、当時の河内潟東岸部における集落の在り方を考察するうえで重要な遺跡である。また後期の遺跡としては明確ではないが、各遺跡から土器が比較的にまとまって出土することから集落の存在は推定できる。特に、中垣内遺跡で検出した自然河川からは完形の土器が出土しており、当遺跡から東方1kmに位置する国見高地性遺跡との関連性が考えられる。

古墳時代に入ると、市域においても多数の古墳が造営されるようになる。前期の古墳は確認されていないが、中期では堂山1号墳、峯垣内古墳、後期に入ると群集墳が多数形成されるようになり、堂山古墳群、墓谷古墳群、宮谷古墳群、北条古墳群、寺川古墳群、大谷古墳群などがある。特に、中期の堂山1号墳からは三角板皮綴短甲、衝角付冑、鉄刀、鉄鎌など、多量の鉄製武器、武具類が出土していることから首長墓的性格の強い古墳と考えられており、市域における古墳時代を考えるうえで重要な古墳である。また集落では、中垣内遺跡、鍋田川遺跡、北新町遺跡、北条西遺跡で確認されている。特に中垣内遺跡、鍋田川遺跡では占骨、刻骨が出土していることから非常に祭祀色の強い遺跡と考えられており、また北新町遺跡では倉庫と推定される大規模な掘立柱建物が検出されている。そして、これらの古墳時代の集落の特徴としては初期須恵器、韓式系土器の出土が目立つことで、当時は河内湖の東縁部にあたることから渡来人の活動が盛んであったことを示すものであろう。

奈良～平安時代では寺川遺跡、元粉遺跡で集落跡が確認されており、特に寺川遺跡では平安時代中頃から後半にかけての井戸が多数検出されているが、その中の井戸の一つに径80cm、長さ1.2mの丸太を削り抜いて井筒として使用していた例は注目される。また北新町遺跡では人面墨書き土器、美濃の刻印のはいった須恵器片などが出土しており役所的な集落跡の存在が推定されている。

中世にはいると北新町遺跡で12～13世紀、御領遺跡で14世紀前～中頃の大規模な集落跡が確認されており、特に北新町遺跡からは12世紀前半に製作された和鏡が出土している。中世も後期に入ると城が築かれ、市域内では三好長慶の居城であった飯盛城、キリシタン大名三箇サンチョの居城であった三箇城などが文献などで知られているが、考古学的には明らかにされていないのが現状で今後の調査に期待されるところが大きい。

近世では、大坂城再築に伴う石垣用採石場である石切場跡遺跡、また宝永元年（1704）の大和川付替工事を契機として新田開発が盛んになるが、その經營、管理のために設けられた施設として平野屋に深野南新田会所が現在も残されている。また東大阪市には国の史跡指定をうけ、うち本屋など5棟の建物が重要文化財に指定されている鴻池新田会所が残されており、これらを中心とした農業経営が市域および周辺においても盛んであったことがうかがわれる。



第2図 市内遺跡分布図

III. 調査方法

今回の調査対象になるのは本体工事部分（484m²）と浄化槽部分（56m²）であるが、掘削土は場外搬出のため、搬出場所確保のため浄化槽部分と本体一部分を残して調査を行い、終了後、引き続き残りの部分の調査を実施した。報告書記述の際にはまとめて取り扱っている。

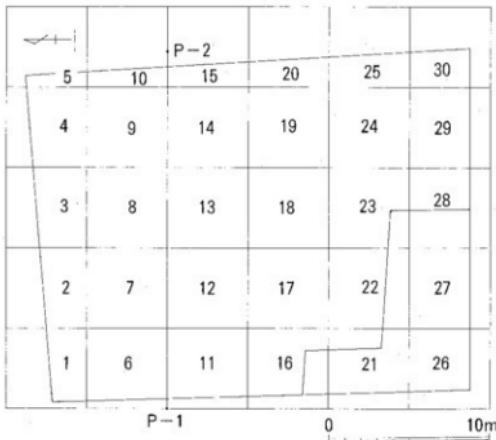
現地調査はバックホーにより盛土、耕作土、床土を除去し、以下の遺物包含層は層位毎に人力による掘削を行った。

調査区の地区割りについては、調査区周辺の境界杭を基準にして測量基準杭（P-1、P-2）を任意に設定し、それにもとづき調査区全体を覆うように 5m × 5m のグリッドを設定した（第3図）。

各グリッドの名称については北西部を起点に東にむかって1区、2区とし、順次、平行式に区割り番号を付し、遺物の取り上げ等の作業に供した。また報告書の記述においてもこれを使用している。

本書における北の表示は特に記さない場合、すべて磁北である。また、標高についてはいずれもT.P.（東京湾平均海面）を基準としている。

調査時に記録する遺構平面図、遺構断面図、遺物出土状況図、調査区土層断面図等の作成についてはすべて測量基準杭（P-1、P-2）を基準にしている。



第3図 調査区区割図

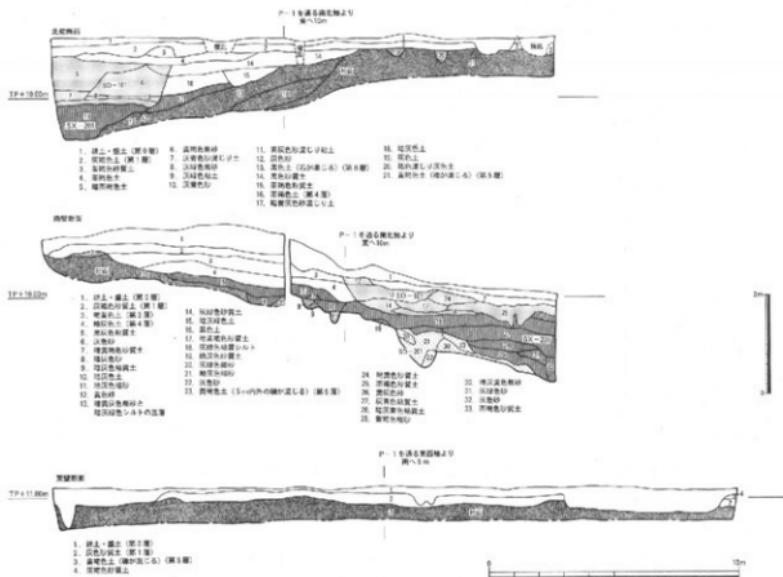
IV. 調査成果

1. 基本層序（第4図）

メノコ遺跡は先述のとおり、扇状地から沖積地にかけて立地する遺跡で、地形的には東から西にかけて緩やかに傾斜していく位置にあたる。

今回の調査地では近年までの水田耕作等により平坦地化されていた。しかし、堆積土層においては整地等により水平堆積する層もみられたが、より下層においては旧地形を反映しており、東から西にかけて厚く堆積していく様相を示していた。

- 基本層序としては調査区に普遍的に堆積する5層、及び地山に相当する2層を確認した。
- 第0層：耕土、盛土。層厚5～50cm。
- 第1層：調査区ほぼ全域に水平堆積する灰～灰褐色の砂質ないし土層である。層厚10～20cm。古墳～奈良時代の土師器、須恵器、綠釉陶器、輸入陶器、瓦器等を包含する。
- 第2層：調査区の南西部に堆積する灰～暗灰色土層である。層厚10～15cm。奈良時代の土師器、須恵器、黒色土器A類などを包含する。
- 第3層：調査区の南半分に堆積する褐黄色土層である。層厚20～30cm。古墳～奈良時代の土師器、須恵器を包含する。第1遺構面のベース層。
- 第4層：調査区の中央部から西にかけての傾斜面に堆積する茶褐色～暗茶褐色土なし粘質土層である。層厚10～60cm。弥生後期の土器、古墳～奈良時代の土師器、須恵器、黒色土器A類、綠釉陶器、埴輪、韓式系土器などを包含する。第1遺構面のベース層にあたる。
- 第5層：調査区東側においてみられる地山に相当する層で、疊混じりの黄褐色土である。層厚は確認しえなかった。
- 第6層：調査区西側においてみられる地山に相当する層で、暗灰～黒色の土なし粘質土である。層厚は確認しえなかった。



第4図 調査区土層断面図

2. 遺構

(1) 第1遺構面(第7図)

基本層序第1、2層を除去し、第3、4層をベース面として検出した。検出面はほぼ水平をしており、標高は平均T.P.+10.7mである。

SD-101(第5図)

調査区西側において南北に走る溝で、南側で東寄りに湾曲している。規模は西肩が調査区外に伸びるため不明であるが、深さは約1.0mを測る。また南に向かって若干の傾斜をもち、北端と南端の比高差は約0.2mを測った。埋土は褐～茶色、灰青～灰緑色系の砂、シル



第5図 SD-101断面図

ト、土、粘土である。遺物は古墳～奈良時代の土師器、須恵器の他、青磁等が出土している。

SD-102(第6図)

調査区中央よりやや東側を南北に走る溝で、SD-101とは並行しており、同様に南側において東寄りに湾曲している。規模は不定形な箇所も見られるが、幅約0.25～0.8m、深さ約0.07～0.15mを測る。埋土は灰色土で南側で若干の鉄分を含んでいた。遺物は飛鳥～奈良時代の土師器、須恵器の他、白磁等が出土している。

SD-103

20区で検出した溝で、東西に走る。規模は両端それぞれ搅乱、SD-102に切られているが、幅約0.45m、深さ約0.1mを測る。埋土は灰色土で、遺物は土師器、須恵器の小片が出土している。

SK-101

4区で検出した土坑で、平面形は不定形を呈する。規模は約1.5～1.7m、深さ約0.01mを測る。遺物は出土しなかった。

SK-102

9区で検出した土坑で、平面形は梢円形を呈する。規模は長径約1.5m、短径約0.45m、深さ約0.35mを測る。遺物は出土しなかった。

SK-103

9区で検出した土坑で、平面形はほぼ梢円形を呈する。規模は長径約1.2m、短径約0.65m、深さ約0.22mを測る。遺物は出土しなかった。

SK-104

9区で検出した土坑で、平面形は不定形を呈する。規模は約0.5～1.95m、深さ約0.18mを測る。遺物は土師器小片が出土している。

SK-105

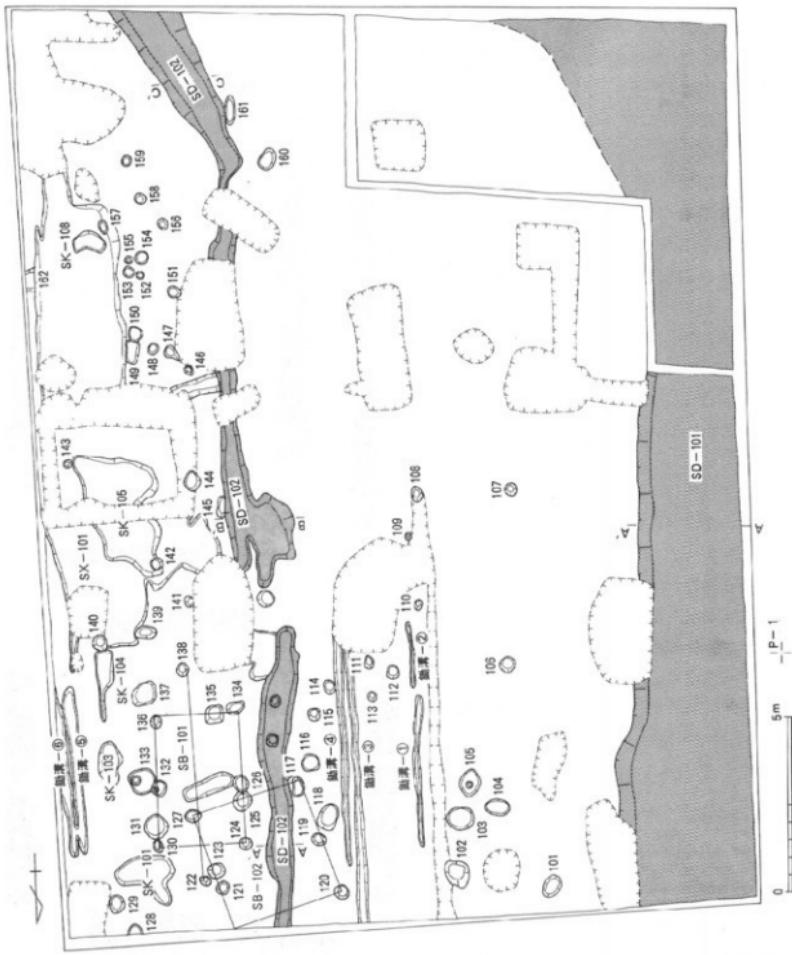
14、20区にかけて検出した土坑で、平面形は不定形を呈する。規模は約1.7～2.9m、深さ約0.11～0.14mを測る。埋土は灰色土で、遺物は土師器、須恵器小片が出土している。

SK-107

8、9、13、14区にかけて検出した土坑で、平面形は不定形を呈する。規模は搅乱で切られている



第6図 SD-102断面図



第7図 第1還横面全体図

ため、不明であるが、深さは約0.08mを測る。埋土は灰褐色土、茶褐色土で、遺物は出土しなかった。
SK-108

24、25区にかけてSX-101の下部より検出した土坑で、平面形は若干不定形の楕円形を呈する。規模は長径約0.9m、短径約0.5m、深さ約0.05mを測る。遺物は出土しなかった。

SB-101(第8図)

調査区北東部で検出した2間×1間の掘立柱建物である。桁行3.8m、梁間2.5mで、桁方向の主軸はほぼ磁北を指す。また北梁間及び南梁間の中央付近外側に各々1ヶ所ずつ棟持柱と思われる柱穴を検出している。柱穴の規模は径約0.3～0.4m、深さ約0.2～0.4m程度である。遺物が出土していないため時期は不明であるが、SD-102との関連性が考えられる。

SB-102(第9図)

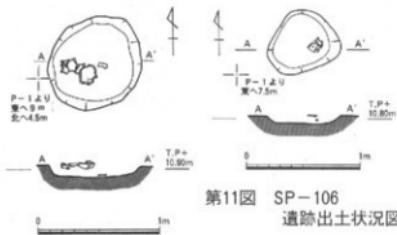
SB-101と重複する2間×2間の掘立柱建物である。桁行3.8m、梁間3.1mで、桁方向の主軸はN-20°-Eを指す。柱穴の規模は径約0.35～0.5m、深さ約0.2～0.4m程度である。遺物が出土していないため時期は不明である。

SX-101

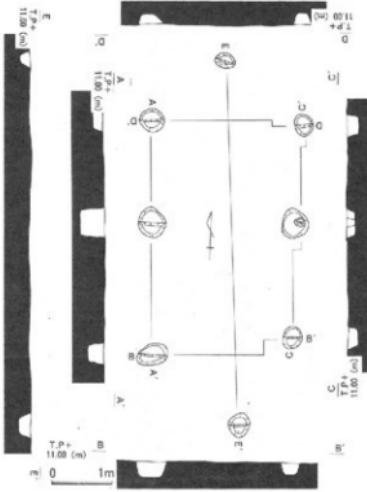
調査区東側において検出した不定形な落ち込み状の土坑である。深さは約0.14mを測る。埋土は灰色土で、遺物は土師器、須恵器片の他、瓦質土器等が出土している。

その他の柱穴群

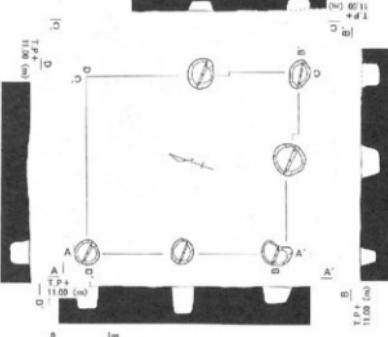
建物に伴う柱穴以外にも多数検出したが、大部分は性格不明のものである。しかし、遺物がまとまって出土しているものもある(第10、11図)。柱穴の規模、埋土等については一覧表を作成した。(第1表)



第11図 SP-106
遺跡出土状況図



第8図 SB-101平面図・断面図



第9図 SB-102平面図・断面図

第10図 SP-103遺跡出土状況図

遺構番号	地区	形・状	規格(cm)	深さ(cm)	土色・土質	備考	遺構番号	地区	形・状	規格(cm)	深さ(cm)	土色・土質	備考
101	2	円内	65×46	4.0	灰色土		134	9	団丸方	45×30	25.1	暗赤褐色土	SB-101
102	2	圓丸方	70×70	67.5	暗赤褐色土		135	9	団丸方	48×48	18.0	暗黄色土	
103	7	円	74×74	8.6	暗黄色土		136	9	円	28×28	17.3	暗灰黄色土	SB-101
104	7	円内	72×45	1.8	灰色土		137	9	団丸方	64×64	34.4	暗赤褐色土	
105	7	円内	78×62	5.0	黄褐色土		138	9	円	32×32	19.9	暗褐色土	SB-101
106	7	円	45×45	1.2	黄褐色土		139	14	円	58×32	11.4	暗灰黄色土	
107	12	円	34×34	13.9	暗灰色土		140	14	円	40×40	24.0	灰褐色土	
108	13	椭円	42×32	12.7	暗褐色土		141	14	椭円	28×24	17.1	灰色土	
109	13	円	18×18	8.4	灰色土		142	14	円	28×28	7.2	灰色土	
110	13	円	20×20	16.3	暗黄色土		143	20	椭円	24×20	6.9	灰色土	
111	8	椭円	33×26	11.7	暗褐色土		144	14~19	椭円	56×46	23.7	茶褐色土	
112	8	圓方	36×30	3.1	灰褐色土		145	14	椭円	60×20	26.6	暗灰褐色土	
113	8	円	24×24	8.4	灰褐色土		146	19	円	28×26	20.5	茶褐色土	
114	8	椭円	40×30	20.2	暗赤褐色土		147	19	椭円	50×35	14.3	茶褐色土	
115	8	円	34×34	23.4	暗赤褐色土		148	19	椭円	36×30	15.3	暗褐色土	
116	8	円	50×50	2.9	灰褐色土		149	19	圓方	60×46	24.2	暗赤褐色土	
117	8	円	52×30	28.4	茶褐色土	SB-102	150	19	円	40×40	20.2	暗赤褐色土	
118	8	椭円	70×50	29.8	暗褐色土		151	24	円	38×38	15.2	暗灰褐色土(中等褐色)	
119	3	円	40×40	45.3	茶褐色土	SB-102	152	24	円	20×20	13.1	暗褐色土(中等褐色)	
120	3	円	38×38	34.1	暗褐色土	SB-102	153	24	円	30×30	18.1	暗褐色土(中等褐色)	
121	4	圓方	38×38	14.5	暗灰褐色土		154	24	円	36×36	25.9	暗褐色土(中等褐色)	
122	4	円	30×30	15.4	暗灰褐色土	SB-101	155	24	円	20×20	18.3	暗褐色土(中等褐色)	
123	4	圓方	50×50	17.5	暗灰褐色土	SB-102	156	24	円	25×25	20.0	暗灰褐色土	
124	4	円	38×38	16.5	暗灰褐色土	SB-101	157	24	椭円	42×24		暗灰褐色土	
125	9	円	52×52	31.4	暗褐色土	SB-102	158	24	円	30×30	28.2	暗灰褐色土	
126	9	円	42×42	39.9	暗灰褐色土	SB-101	159	24	円	28×28	20.6	暗灰褐色土	
127	9	円	36×36	3.9	暗褐色土	SB-102	160	20~24	圓方	60×44	37.9	暗灰褐色土	
128	4	(円)	(38×38)	7.1	暗灰褐色土	SB-101	161	29	椭円	80×30	8.4	暗灰褐色土	
129	4	円	43×43	27.1	黃褐色土		162	25	(円)		15.7	灰色土	SB-101
130	4	椭円	38×26	19.6	暗褐色土	SB-101	163	8	圓方	39×34	16.4		
131	4~9	圓方	68×68	21.5	黃褐色土		164	8	椭円	34×30	14.2		
132	9	圓方	42×42	13.7	黃褐色土	SB-101	165	13~14	椭円	46×42	30.1		
133	9	圓方	72×72	7.8	灰褐色土								

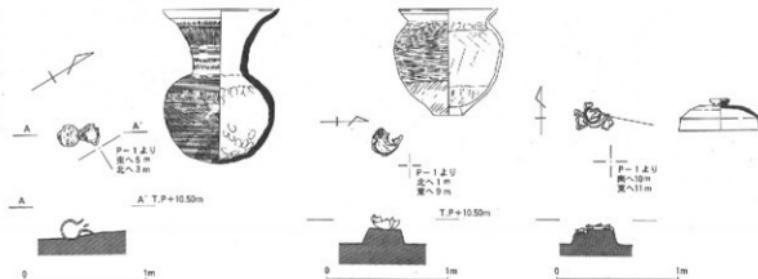
第1表 第1遺構面 ピット計測表

(2) 第2遺構面(第13図)

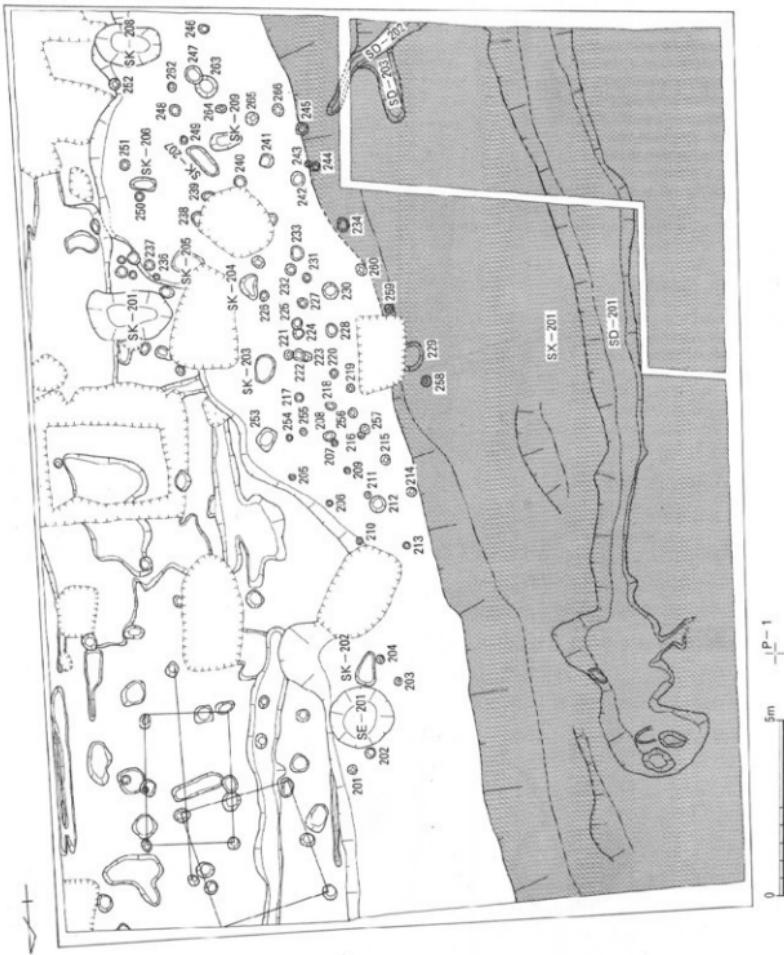
基本層序第3、4層を除去した面で検出した。検出面は東から西にかけて緩やかに傾斜しており、東側で標高T.P.+10.6m、西側で標高T.P.+10.2mを測った。

SD-201

調査区西側において南北に走る溝で、SX-201の下部より検出した。北側では幅約1.5~3.0m、深さ約0.4mのよどみ状を呈しており、南側では幅約2.0m、深さ約1.0mを測り、南に向かって深くなる様相を示していた。埋土は灰~灰緑色の粗砂が主体を成しており、遺物は古墳時代中期~後期にかけての土師器、須恵器が多数出土しており、特に南側の深部では古墳時代後期に比定される、体部最大幅80cm、器高約1m程の須恵器大甕が出土している。



第12図 第4層 遺物出土状況図



第13图 第2道横面全体图

SD-202 (第14図)

28区で検出した溝で、北東から南東にかけて走る。規模は調査区外に伸びるため不明であるが幅約0.3~0.6m、深さ約0.2mを測る。埋土は暗灰色粗砂が主体を成しており、遺物は古墳時代に比定される土師器、須恵器の他、韓式系土器片、サヌカイト片などが出土している。

SD-203

28区で検出した溝で、ほぼ南北に走る。SD-201に切られている。規模は調査区外に伸びるため不明であるが、幅約0.6~1.0m、深さ約0.25mを測る。埋土は暗灰色砂、暗灰色粘質土で、遺物は出土しなかった。

SK-201 (第15図)

19区で検出した土坑で、平面形はやや不定形な楕円形を呈する。規模は長径約2.3m、短径約1.5m、深さ約0.7mを測る。遺物は古墳時代に比定される土師器壺、高杯、須恵器杯身などが出土地していいる。

SK-202

8区で検出した土坑で、平面形は不定形な楕円形を呈する。規模は長径約0.95m、短径約0.5m、深さ約0.18mを測る。埋土は黒色土で、遺物は出土しなかった。

SK-203

18区で検出した土坑で、平面形はほぼ楕円形を呈する。規模は長径約0.8m、短径約0.55m、深さ約0.35mを測る。埋土は茶褐色土で、遺物は土師器片が出土している。

SK-204

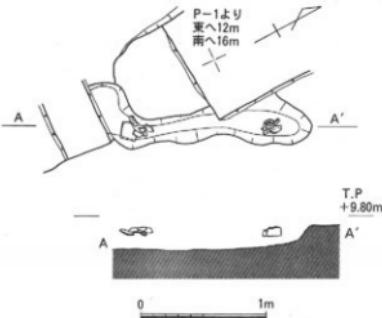
23、24区にかけて検出した土坑で、平面形は不定形を呈する。規模は約0.5~0.7m、深さ約0.23mを測る。遺物は土師器、須恵器小片が出土している。

SK-205

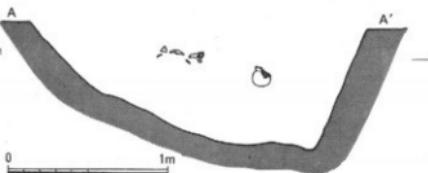
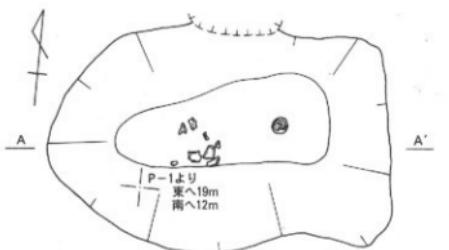
24区で検出した土坑で、平面形は搅乱に切られてはいるが、ほぼ楕円形を呈するものと思われる。規模は長径約0.85m、短径約0.6mを測る。遺物は土師器、須恵器小片が出土している。

SK-206

24区で検出した土坑で、平面形は楕円形を呈する。規模は長径約0.85m、短径約0.35m、深さ約



第14図 SD-202遺物出土状況図



第15図 SK-201遺物出土状況図

0.35mを測る。埋土は灰色土で、遺物は出土しなかった。

SK-207

24区で検出した土坑で、平面形は不整形な楕円形を呈する。規模は長径約1.05m、短径約0.42m、深さ約0.15mを測る。埋土は茶褐色土で、遺物は土師器、須恵器片が出土している。

SK-208

29区で検出した土坑で、平面形は不整形な楕円形を呈する。規模は長径約1.85m、短径約1.1m、深さ約0.62mを測る。遺物は古式土師器片が出土している。

SK-209

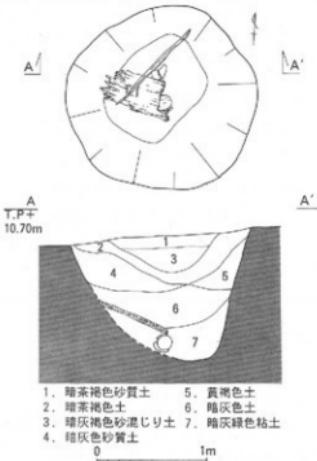
24区で検出した土坑で、平面形はほぼ楕円形を呈する。規模は長径約0.9m、短径約0.5m、深さ約0.55mを測る。埋土は暗灰色土、茶褐色砂質土で、遺物は土師器、須恵器小片が出土している。

SE-201（第16図）

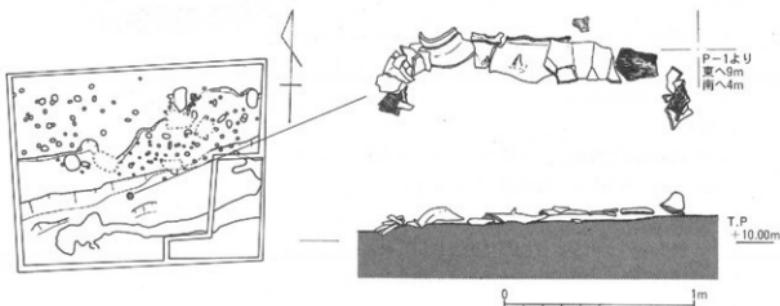
8区で検出した素堀りの井戸である。平面形はほぼ円形を呈し、規模は径約1.7m、深さ約1.15mを測る。埋土は暗灰色～暗茶褐色の砂質土、土が主体をなし、遺物は古墳時代中期に比定される土師器壺、須恵器甌の他、木製扉材の一部などが出土している。

SI-201（第17図）

12区においてSX-201の埋没後の上部において検出した。平面形は東西に長い長方形を呈し、長さ約1.4m、幅約0.2mを測る。土器群は復元すると一個体の移動式竈であった。出土状況については意識的に敷き詰めた様相を示しており、何らかの意図的な行為を思わせるものである。



第16図 SE-201遺物出土 状況図・断面図



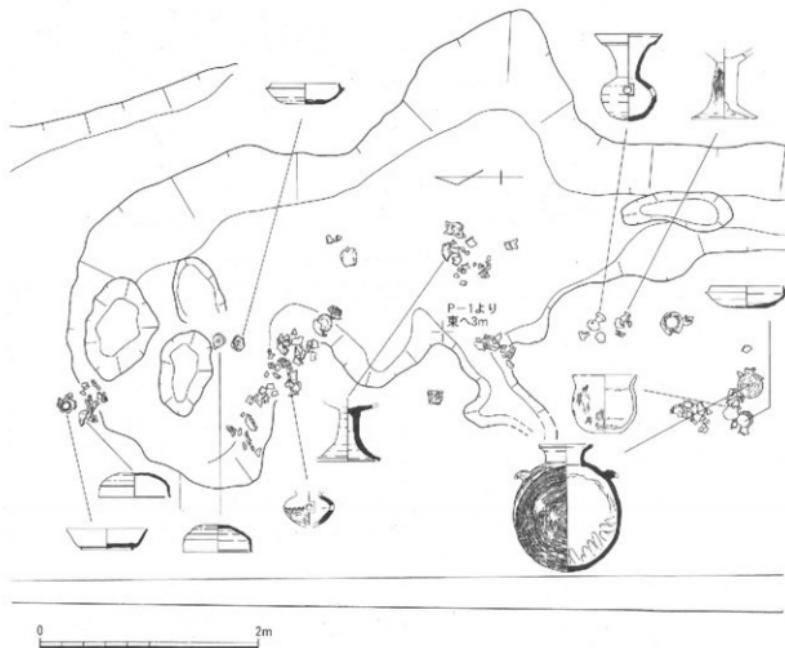
第17図 SI-201遺物出土状況図

SX-201

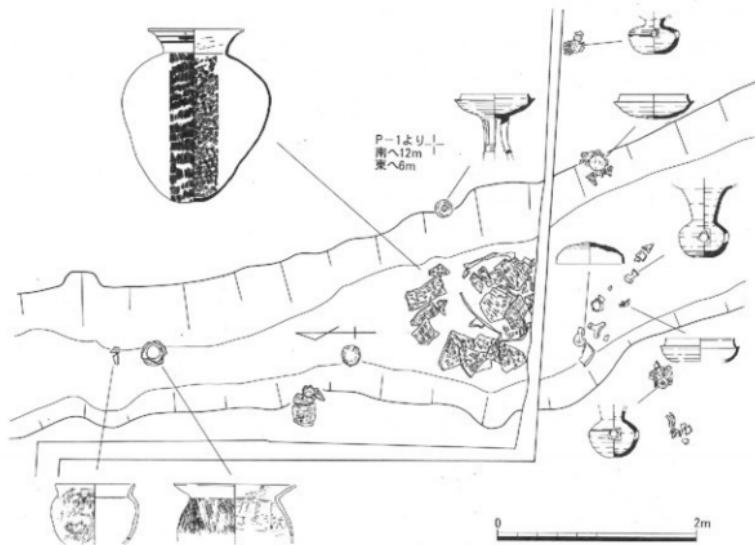
調査区中央から西にかけてなだらかに落ち込むもので、調査区西端では深さ約1.0～1.3mを測る。埋土は灰～灰青のシルト、微砂、砂、及び粘質土、粘土が主体をなし、遺物は古墳時代中期～後期にかけての土師器、須恵器の他、韓式系土器、埴輪などが多く出土している。

柱穴群

第2遺構面においても、柱穴を多数検出したが建物に伴うものかどうかは確認し得なかった。規模、埋土については一覧表を作成した。(第2表)



第18図 SD-201、SX-201遺物出土状況図（北側部分）



第19図 SD-201, SX-201遺物出土状況図(南側部分)

遺構番号	地区	形	次	規模(cm)	深さ(cm)	土色・土質	備考	遺構番号	地区	形	状	規模(cm)	深さ(cm)	土色・土質	備考
201	8	円		26×26	12.2	暗灰青色土		234	23	円	36×36	19.1	黑褐色土		
202	8	円		30×30	11.6	暗灰青色土		235	23	(円)	(34×)	14.2	茶褐色土	柱に附されている	
203	8	円		22×22	8.2	暗灰青色土		236	24	円	16×16	11.9			
204	8	円		22×22	9.9	暗灰青色土		237	24	円	30×30	23.2	暗灰青色土		
205	13+14	円		17×17	10.9	灰色土		238	24	(円)	(42×)	13.5	暗灰青色土	柱に附されている	
206	13	円		18×18	11.9	茶褐色土		239	24	(円)	(36×)	12.1	暗灰青色土	柱に附されている	
207	18	円		20×20	18.0	暗灰青色土		240	24	円	30×30	8.8	暗灰青色土		
208	18	円		32×32	6.2	暗灰青色土		241	23	鷹丸方	37×37	18.6	暗灰青色土		
209	18	円		18×18	13.4	暗灰青色土		242	23	鷹丸方	38×38	13.8	灰色土		
210	13	円		18×18	11.2	黑色混じり粘土質灰青色土		243	23	円	17×17	7.7	暗灰青色土		
211	13	円		20×20	14.3	茶褐色土		244	23	円	26×25	11.9	暗灰青色土		
212	13	円		45×45	18.6	暗赤褐色土		245	23	円	34×34	10.4	暗茶褐色土		
213	13	円		17×17	11.1	黑色混じり粘土質灰青色土		246	23	円	30×24	17.2	暗茶褐色土		
214	13	円		25×26	8.5	黑色混じり粘土質灰青色土		247	29	円	48×48	13.7	暗灰青色土		
215	18	円		25×25	18.6	黑色土		248	29	円	30×30	23.9	暗灰青色土		
216	18	円		19×19	14.0	黑色混じり粘土質灰青色土		249	24	円	22×20	7.5	灰色土		
217	18	円		25×25	13.3	暗灰青色土		250	24	円	24×24	12.5	灰色土		
218	18	椭円		30×20	10.9	暗灰青色土		251	24	円	28×28	13.2	暗灰青色土		
219	18	円		20×20	11.3	暗灰青色土		252	29	円	30×30	37.2	暗灰青色土		
220	18	円		25×25	6.9	茶褐色土		253	18	鷹丸方	58×48	26.8	暗灰青色土		
221	18	円		24×24	26.0	灰色土		254	18	円	20×20	3.9	暗灰青色土		
222	18	円		30×30	17.5	灰色土		255	18	円	22×22	6.4	暗灰青色土		
223	18	椭円		34×28	13.2	灰色土		256	18	円	26×26	17.0	黑色土		
224	18	円		25×26	22.7	黄褐色土		257	18	円	28×28	22.3	黑色土		
225	18	円		30×30	24.2	黄色土		258	17+18	円	28×28	10.1	暗灰青色土		
226	23	円		26×26	7.3	暗灰青色土		259	18	円	22×22	21.7	暗灰青色土		
227	18	円		28×28	28.2	暗灰青色土		260	23	円	32×32	5.7	暗灰青色土		
228	18	椭円		38×38	9.2	暗灰青色土		261	23	円	32×32	10.3	暗灰青色土		
229	18	(鷹丸方)	(76×)	18.6	黄褐色土			262	29	円	22×22	25.2	暗灰青色土		
230	23	円		45×45	41.8	茶褐色土		263	29	円	58×58	31.5	暗灰青色土		
231	23	円		23×23	16.5	黑色土		264	28+29	椭円	32×22	16.6	暗灰青色土		
232	23	円		28×28	18.7	黑色土		265	29	円	40×40	16.5	暗灰青色土		
233	23	円		44×40	25.6	黑色土		266	28	円	32×32	15.0	暗灰青色土		

第2表 第2遺構面 ピット計測表

3. 遺物

今回の調査では、土器類、土製品、埴輪、木製品、石製品、金属製品、動物遺体と多種類にわたって出土した。特に土器類が大量に出土しており、できる限り図示することに努めたが省略されたものも多い。以下、紙幅の関係もありここでは各出土遺物の概略を述べることにしたい。

(1) 土器類(第20~30図)

① 弥生土器

第4層、SX-201から前期の壺(88)や、第4層、SD-201から中期の壺、高杯などが散見されるが、特に第4層、SX-201からは比較的まとまって後期の壺、甕、高杯が出土している。広口壺(89)、長頸甕(90)、甕(241~243)など、残りのよいもの、また完形に復元できるものもある。

② 土師器

杯は(1、75、91~93、247)が出土しており、放射状暗文が施されているもの(1、247)がある。

皿は(20、94、120、234、235)が出土している。120は他に比べると比較的器壁が厚いものである。

鉢は(2、78、248、249)が出土しており、底部外面に木の葉痕の残るもの(78)や、鉄鉢を模倣したもの(248)がある。

壺は小型壺(21、95、96)、直口壺(83、258)、二重口縁壺(244)などが出土している。

甕は(14、16~18、22~25、79、97~110、245)が出土している。主に古墳時代後期から飛鳥~奈良時代にかけてのものであるが、体部内面にヘラ削りを施すもの(22、24、99~101)、口縁端部を若干肥厚させ面をもつもの(98、245)など、布留系の甕や東海系の特徴をもつ脚部(111)もみられる。また、完形に復元された長胴甕(108)がある。口径19.0cm、体部径20cm、器高43.3cmを測り、外面は横方向のハケ調整、内面はナデ調整を施すが、内面には粘土紐接合痕を明瞭に残している。

高杯は(3、26、76、77、112~114)が出土している。飛鳥~奈良時代のものも散見されるが、総じて古墳時代のものが大半を占めており、布留系高杯(76、77)、布留系大型高杯(26)、後期型高杯(246)がある^[1]。

羽釜は(115、116)が出土しており、口縁部が屈曲するもので、116は体部外面にハケ調整を施している。また、跨のみの破片も多くみられた。

飯は(4、27、80、117~119)があり、ナデ調整(27、80)、ハケ調整(4、118)、タタキ(17)を施すものがある。また、117は口縁端部内面に沈線を施している。119は底部で、外面には横方向のヘラ削りを施し、多孔式と思われる。

③ 須恵器

杯は蓋(5、6、12、29~37、122~139、238、250、251)、身(8~11、15、39~52、81、141~164、239、240、253~256)がある。今回の調査では一番出土量の多かったもので、古墳時代から奈良時代にかけて出土している。内容的には静止ヘラ削りを施すもの(29)など、陶邑編年I型式1段階^[2]に属するものが若干みられるが、量的にはII型式4段階前後のものが最も多く、次にII型式1・2段階、I型式3~5段階が同程度出土した状況であった。III型式、IV型式は極力図示することに努めたため、比較的多くみられるが量的には僅かなものである。

鉢は(199)1点が出土したのみで、口径9.6cm、器高8.0cmを測る。平底を呈するもので、体部底部付近には静止ヘラ削りを施し、底部外面はヘラナデ調整を施している。

椀は(67、200、201)があり、67、200は把手付椀である。67は体部に2条の突帯を巡らし、間に4条の波状文を施す。また、把手上には棒状の細い粘土紐をV字状に折り曲げて付帯している。200は体部が僅かに丸みを帯び、中央に9条の波状文を施している。

壺は無蓋短頸壺（166）、有蓋短頸壺（54、167、168）、細頸壺（170）、広口壺（257）などがあり、170は体部上方にヘラ記号を施している。また、170は百濟系の平底瓶の可能性もあると思われる。

甕は（55～66、172～198）があり、時期的には杯とほぼ同じ様相を示すが、他器種に比べて初期須恵器の範疇に属すると思われるものの出土が目立つ。中型甕においても172、173など、口縁端部下方に突帶を付するものもみられるが、特に大型の甕においては破片ではあるが、内面を丁寧なナデ調整、当て具痕を残すものの、ハケ調整を施すもの、外面においても平行タタキが主流であるが、丁寧なナデ、格子のものが若干あり、繩席文を施すものなど、多数出土している。その他では63が口縁部が欠損する程度のはぼ完形の状態で出土したもので、口径54.4cm、体部最大幅85.8cm、器高98.4cmを測る大型の甕が出土している。176は焼きが悪く、殆ど土質の状態のもので、口縁部と体部との接合面が丁寧にナデ調整されているように見受けられ、用途的に不明なものである。

高杯は（7、38、68、69、202～215）がある。無蓋（202）、有蓋（203、204）の両者があり、7、38、202は有蓋の蓋である。脚部では短脚1段透かし、長脚1段透かし、長脚2段透かしがある。透かしは長方形を呈するものが主流であるが、施さないもの、円形のもの（68、205、209）もある。また69では杯部内面見込みにヘラ記号を施している。

提瓶は（71、220、221）があり、221はほぼ完形の状態で出土した。口径9.8cm、体部19.6cm、器高23.0cmを測り、体部は全面に丁寧な回転カキメ調整を施し、肩部には鍵状の把手を付している。

甕は（70、84、216～219）があり、初期須恵器の範疇に属するもの（84、216、217）、陶邑編年II型式4段階前後に属するもの（70、218、219）がある。84、217は体部下半にタタキを施している。

甕は（222）があり、口径は21.6cmを測る。外方に向かって直線的に伸び、外面は平行タタキを施し、1条の沈線を巡らしている。色調は灰色を呈する。

器台は（72～74、223～225）がある。223は口縁端部直下に1条の突帶を巡らし、下方には断面三角形の突帶を3条1組巡らしている。また、上向鋸歯文を施し、内部は左下がりの平行線を施している。関川尚功氏の分類ではIBaにあたる¹³⁾。72は2条1組の突帶を4帯巡らし、5区の文様帶を構成しているものと思われるが、最下部は残っていない。上より無文、波状文、波状文、下向鋸歯文を施している。鋸歯文の内部は針状施文具による非常に雑な垂直線状の線刻を施している¹⁴⁾。また、上より3、4区には平行タタキを施している。72と225は胎土、突帶、波状文等では一見、同一個体と思われるが、鋸歯文の施文方法で若干の違いがみられる。

その他では車輪文を有するもの（226～228）、ヘラ記号を施すもの、破片の溶着するもの、窯の床面？が付着するものがある。

ヘラ記号を有するものは先述の細頸壺（170）、甕（191）、高杯（69）の他に、SD-201から杯片4点、SX-201から杯片4点、甕片1点、第4層から壺片1点が出土している。

破片の溶着するものは、SD-201から3点、SX-201から4点、第4層から3点出土している。器種は杯蓋、杯身、甕で、なかには初期須恵器と考えられるものもある。

窯の床面？が付着するものは、SD-201で1点、SX-201で4点、第4層で1点出土している。

④ 黒色土器

SP-212からA類1片（85）、第2層からA類1片（237）、第4層からA類3片、B類1片が出土している。

⑤ 緑釉陶器

第1層から底部片2片(233)、第4層から底部片2片が出土している。近江産が2片、東海産が2片あり、233は近江産である。また、第4層からは陰刻花文を施すものも出土している。

⑥ 灰釉陶器

SK-105から底部1片(13)、SP-149から底部1片(19)がそれぞれ出土している。

⑦ 瓦器

復元できるものが1点出土している(236)。口径15.0cm、器高5.5cmを測る。内外面共に密なヘラミガキ調整を施し、内面見込みにはジグザグ状の暗文を施す。口縁端部には沈線を施し、高台は断面台形状を呈する。

⑧ 輸入陶磁器

青磁は第1層から1片、北西側側溝より1片が出土している。いずれも龍泉窯系の椀口縁部で蓮弁文を施しているものも見受けられる。

白磁はSD-104から1片、南側側溝より1片出土している。いずれも椀口縁部で、玉縁状を呈し、森田分類のIV類に分類されるものである⁽⁵⁾。

⑨ 製塙土器

SP-154から1片、SD-201から2片、SX-201から7片、第4層から5片出土している。いずれも広瀬分類の丸底I式に分類され⁽⁶⁾、内面はすべてナテ調整であるが、外面はナテ調整、横方向のタタキを施すものがある。(230)は唯一完形に復元できるもので、口径3.6cm、器高5.9cmを測り、外面は横方向のタタキ、内面はナテ調整を施す。古墳時代中期後半～後期初頭の年代が与えられている。

⑩ ミニチュア土器

土師質(28、121)と須恵質(229)が出上している。それぞれ完形に復元し得たもので、28は口径7.6cm、器高4.8cm、121は口径6.4cm、器高5.2cm、229は口径4.9cm、器高5.3cmを測る。

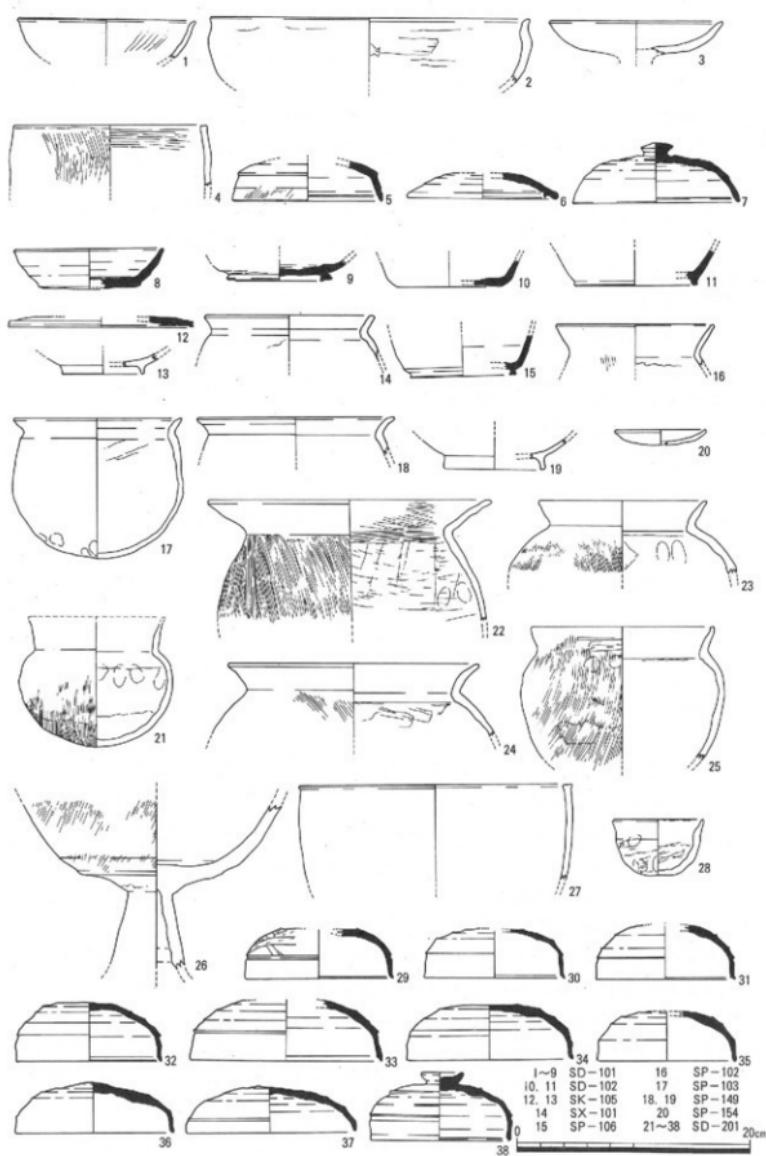
⑪ 瓦質土器

231は杯身、232は高杯脚部で、脚部外面は密なヘラミガキ調整を施している。朝鮮半島の瓦質土器とは異質であり、また通常いわれる中世の瓦質土器ではなく、器形的には古墳時代に属するものと思われる。類例としては、堺市小坂遺跡で甕、直口壺⁽⁷⁾、寝屋川市楠遺跡で杯、高杯脚部⁽⁸⁾、八尾市志紀遺跡で杯が出土している⁽⁹⁾。これらの土器は初期須恵器、韓式系土器と共に伴する例が多く、これらと同じ性格を持つものと思われる。

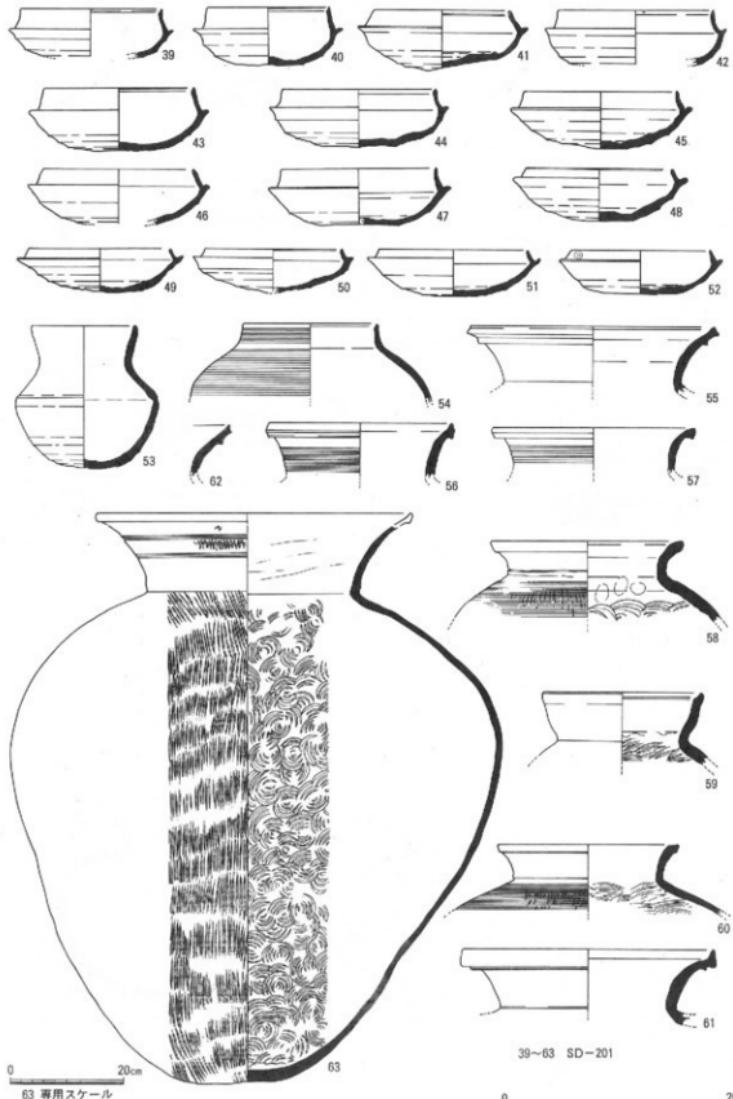
⑫ 韓式系土器⁽¹⁰⁾(第29、30図)

軟質土器は(259～286)がある。ほとんどが破片であり、器種を限定することは難しいが、259は平底鉢と思われ、体部外面には平行タタキを施す。273は甕または鍋の体部下半から底部にかけてのもので、底部付近内面には無文の当て具痕がみられる。色調は明橙色、明赤褐色、にぶい黄橙色の3種類があり、明橙色のものは焼成がややあまい。外面は280の斜格子タタキを除いてすべて格子タタキで、内面はすべてナテ調整を施している。また、格子タタキにおいても大小の2種類がみられる。

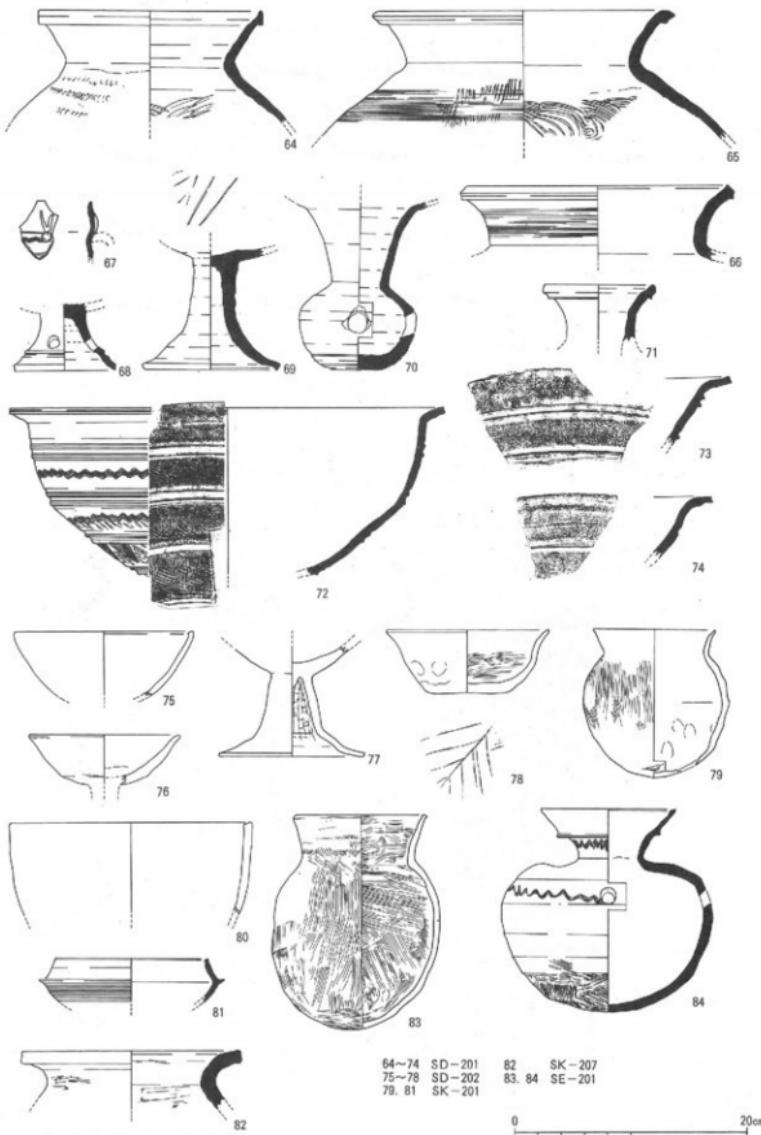
陶質土器は(287～298)があり、287～290は鳥足文タタキを施し、291には長方形格子タタキを施している。287は他に比べて器壁が薄く、鳥足文も鮮明で全体的に丁寧につくられている。



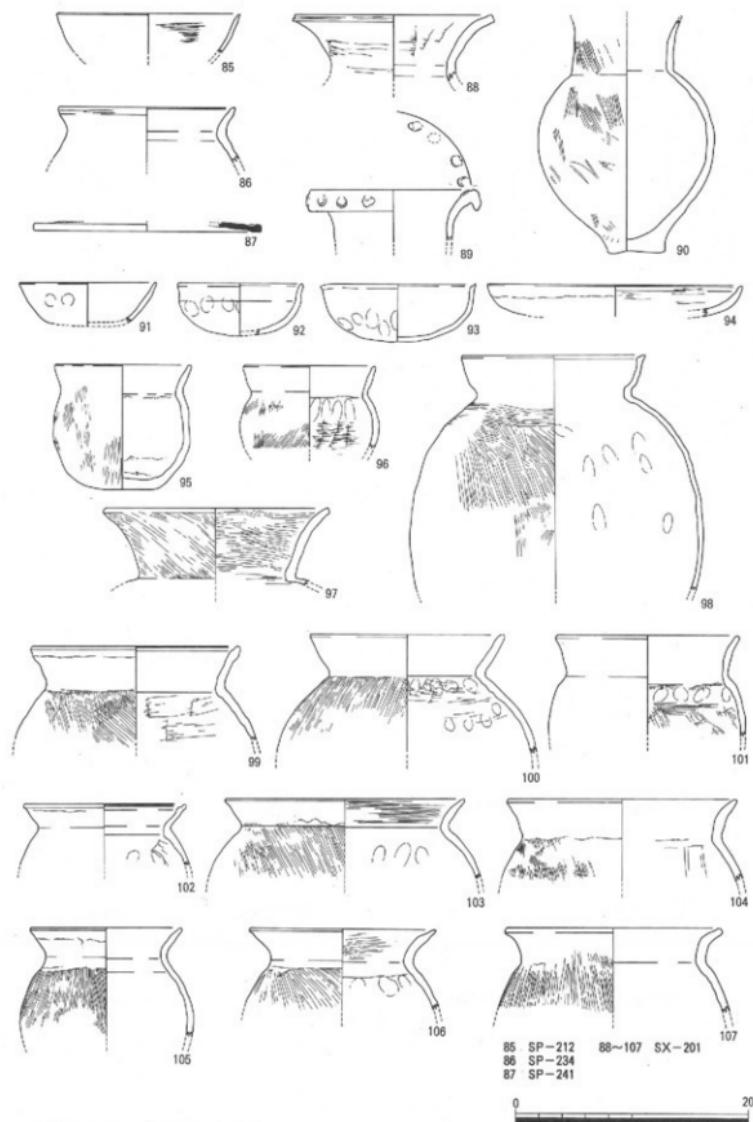
第20図 土器実測図(1)



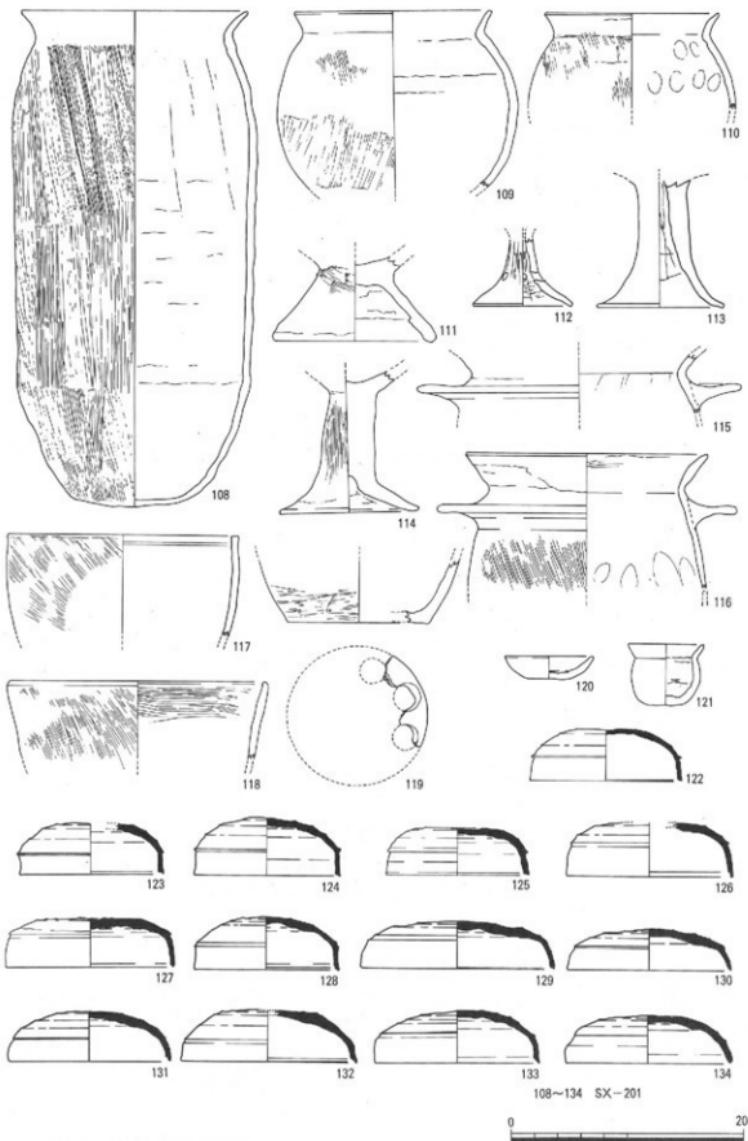
第21図 土器実測図(2)



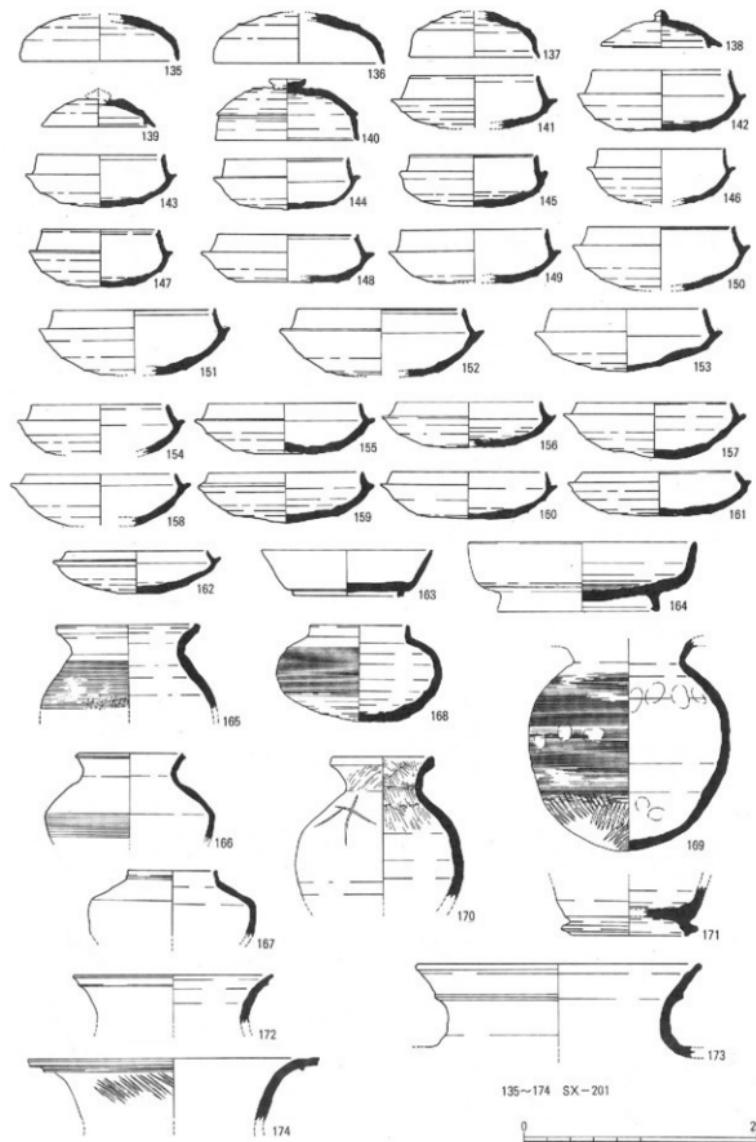
第22図 土器実測図(3)



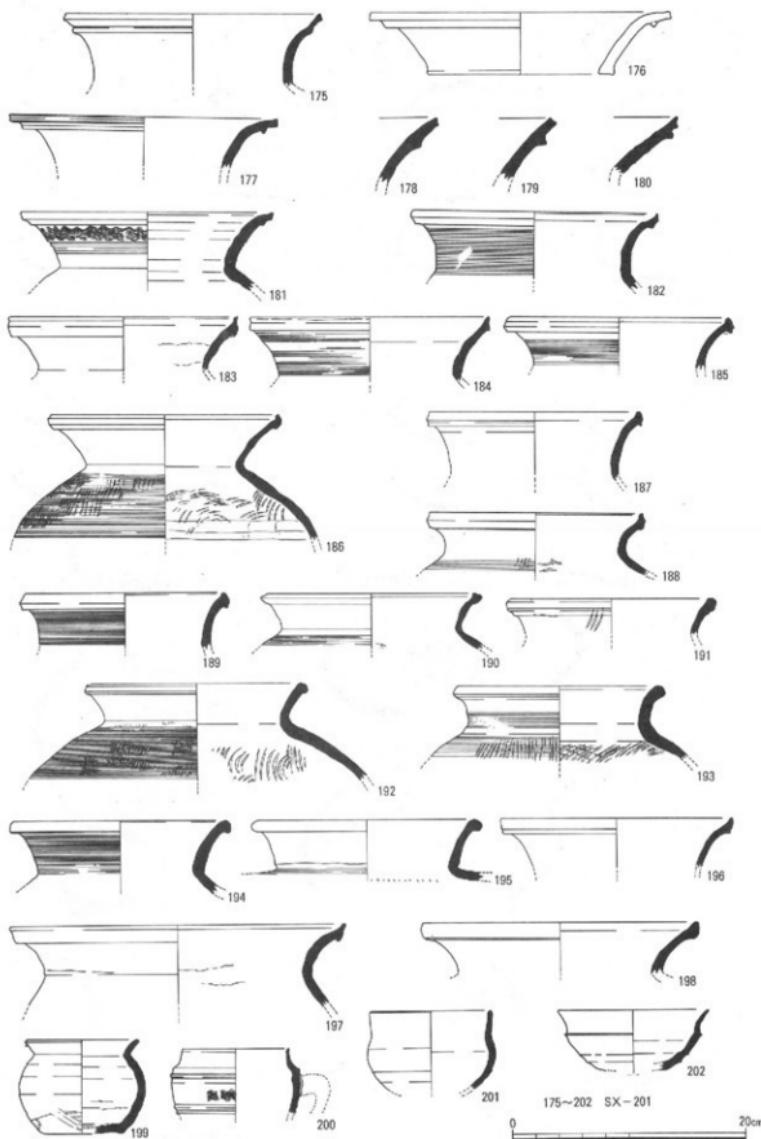
第23図 土器実測図(4)



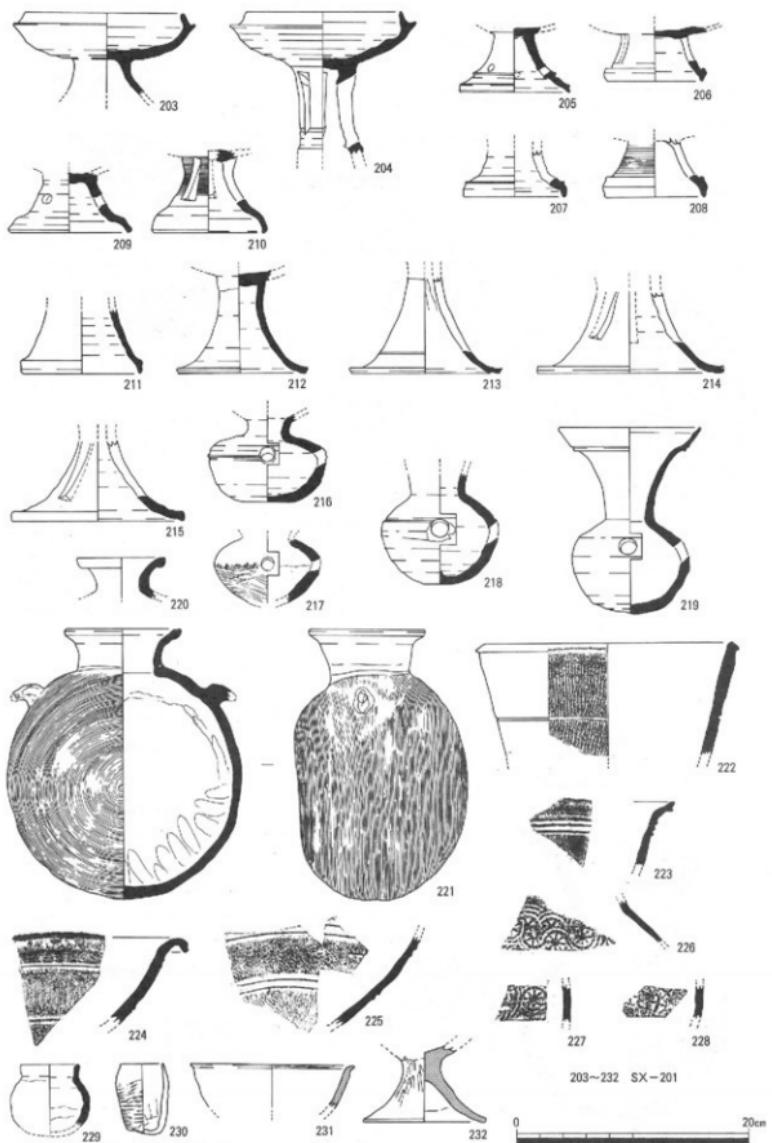
第24図 土器実測図(5)



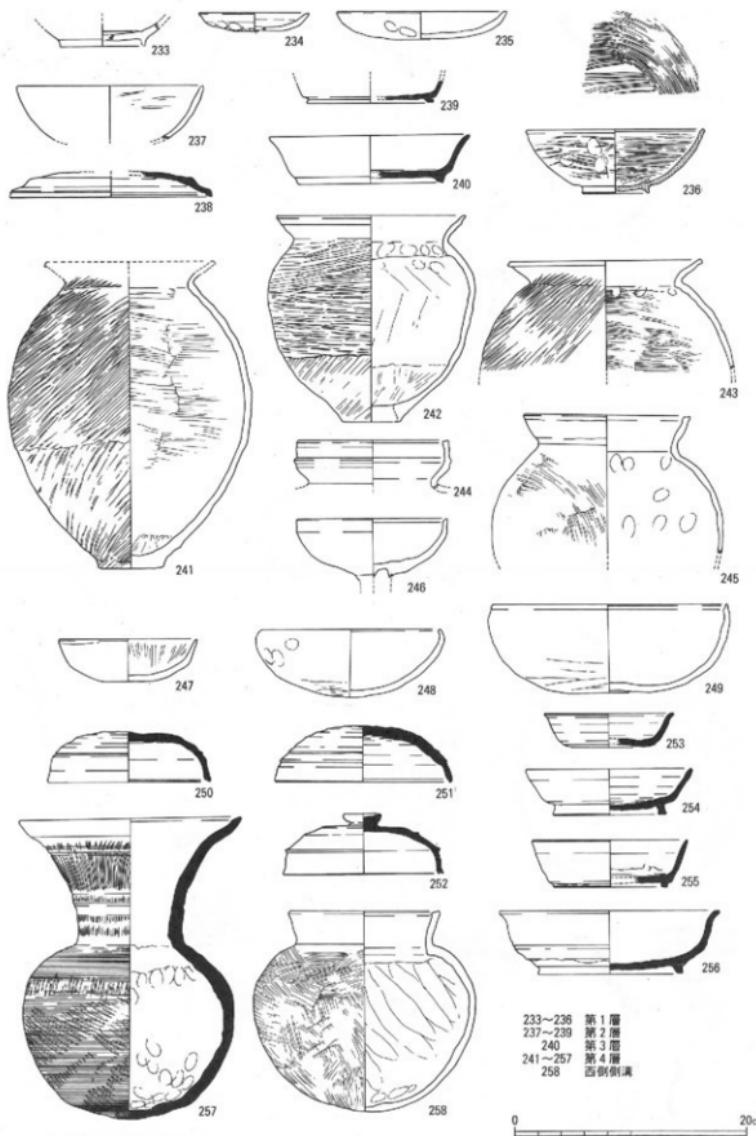
第25図 土器実測図(6)



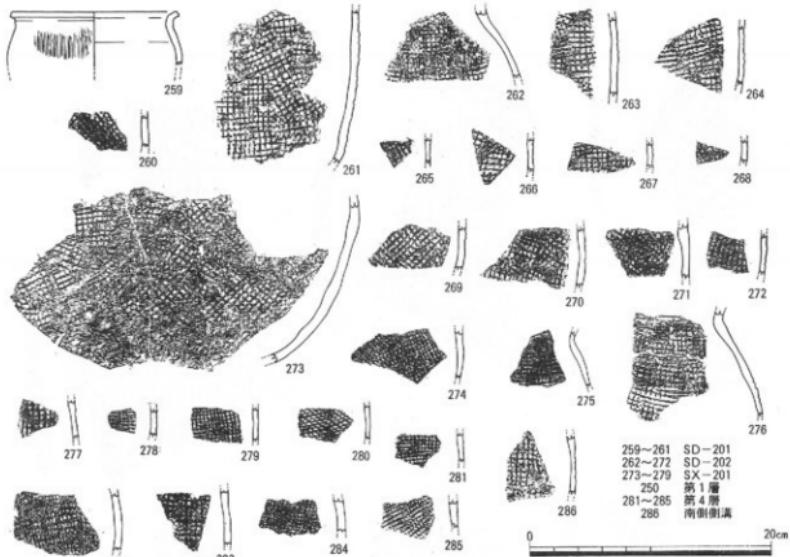
第26図 土器実測図(7)



第27図 土器実測図(8)



第28図 土器実測図(9)



第29図 韓式系軟質土器実測図・拓影

289は沈線を巡らし、体部下半には格子タタキを施している。288、289は色調、胎土、調整からみて同一個体と思われる。292～294は平行タタキに沈線を巡らすものであるが、294はナデ状に太い沈線を巡らす。また292は平行タタキの後、ハケ調整を施している。295は格子タタキ、296、297は繩彫文、298はナデ調整をそれぞれ施し、沈線を巡らすもので、296は今回出土した陶質土器のなかでは舶載された可能性が高いものである。色調は287、295、298が灰白色、288、289、292が灰青色、290、293が灰色、291、296がセピア色、294、297が暗灰色である。また、胎土については陶邑産の胎土とは異なるようである。

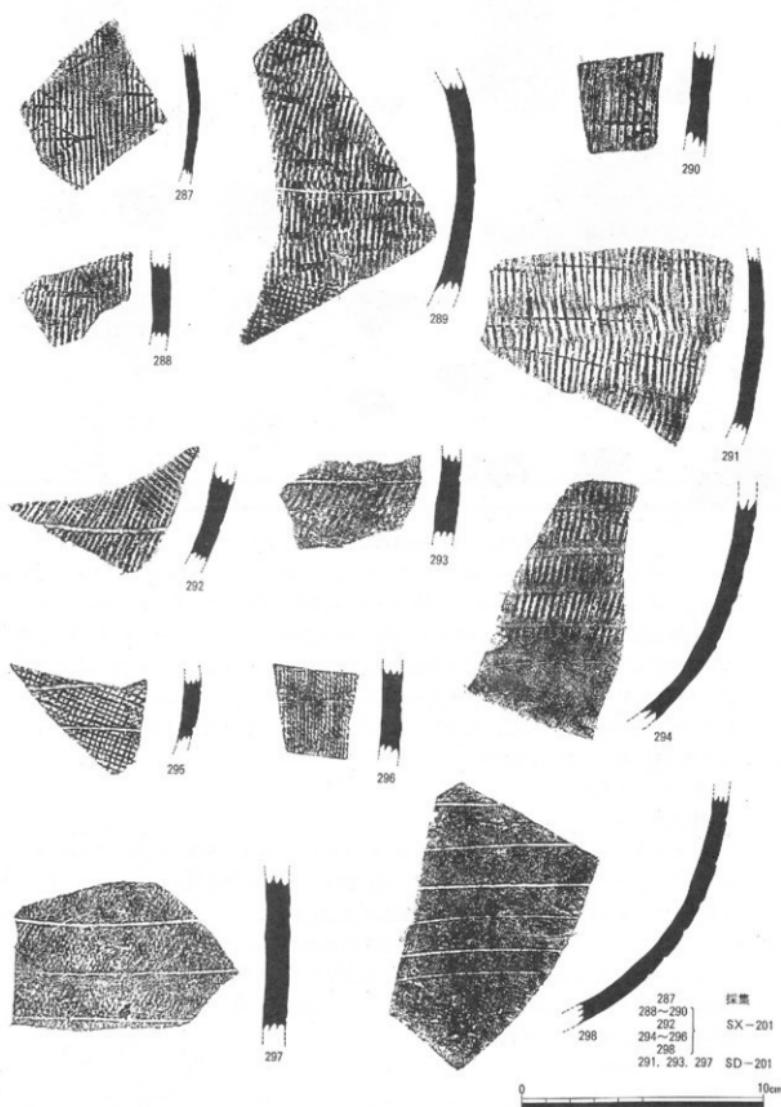
(2) 土 製 品 (第31図)

① 移動式竈 (299)

完形に復元し得たものである。掛け口は直径約26.8cm、器高は約36.6cmを測る。形状は掛け口から底部にかけて裾広がりの状態で終わり、底は焚口の上部のみに成形される。また、焚口周辺には補強するように突帯を巡らし、先端は底部から突出させている。これはより酸素供給の効率化をはかるための工夫であろう。角状の把手は下向きに付けられ、壁面内側から3.2cmにかけて中空になっている。調整では外面に僅かなハケ調整がみられるが、内面は全面に丁寧なハケ調整が施され、掛け口端部内面にはヘラ削りを施している。また、外面には黒斑を有しているが、煤の付着は内外面共に認められなかった。

② 土 馬 (300)

脛部の後ろ側と思われるが、脚、尾共に欠損している。残存径12.1cm、縦幅6.2cm、横幅4.8cmを測る。7～8世紀の土馬の形態からすれば非常に粗雑なつくりであり、時期の下るものであろうか。



第30図 韓式系陶質土器拓影

③ 当て具 (301)

無文のもので、平面形はほぼ円形を呈する。直径約7.0cm、厚さ約3.1cmを測る。握部は欠損しているが、ほぼ垂直に付すものと思われる。色調は黄灰～黄褐色を呈する。土製の無文当て具の出土例は非常に珍しく、陶製の無文当て具では堺市大庭寺遺跡¹¹、小阪遺跡¹²での出土例がある。

④ 土玉 (302)

楕円形を呈し、長径約1.8cm、短径約1.4cm、重量約3.7gを測る。穿孔は施されていない。

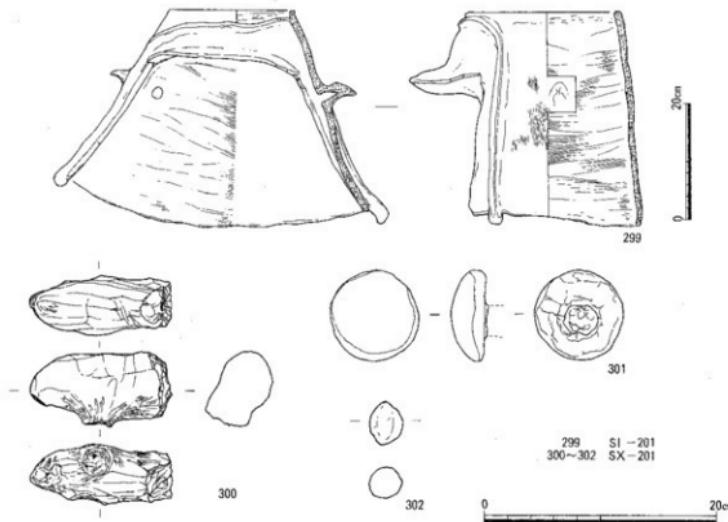
(3) 塙輪 (第32図)

円筒埴輪は(303～314)があり、外面の調整は309のヨコハケ以外はすべてタテハケである。内面はハケ調整を施すもの(304、307、309、310、313、314)とナテ調整を施すもの(305、308)がある。タガは断面が不整形のものである。303、306、311、312は基底部で、すべて底部調整を行っている。また、いわゆる淡輪型の底部技法を施したと思わせるもの(312)もある。型式的には川西編年のV期に相当するもので、年代では5世紀後半に比定するものと思われる。

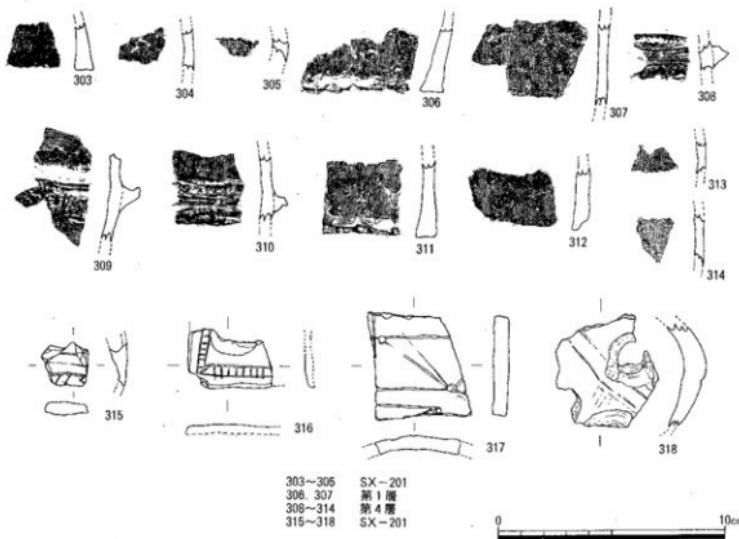
形象埴輪は(315～318)があり、315は盾と思われ、かろうじて綾杉文が認められる。316は背で皮綴が表現されている。また、内面は全面が剥離した状態で厚さは不明である。317は三角板鉢留短甲である。318は馬の左側頭部で耳は欠損しているが、耳と目との間に面繫の表現がみられる。

(4) 木製品 (第33図)

319は原材で、遺存状態が悪く手斧痕等の細部加工痕は認められなかった。しかし、軸部とその付近にかけては明瞭に残存している。規模は最大残存長73.0cm、幅34.0cm、厚さ4.8cmを測る。軸部は長さ9.6cmを測り、断面形態はほぼ円形を呈するものである。



第31図 土製品実測図



第32図 塗輪実測図・拓影

(5) 石製品（第34図）

320～323は石鏡で、有茎式（320、321）と凹基式（322、323）がある。法量はそれぞれ、320が長さ4.3cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm、重量3.45g。321が長さ5.5cm、幅2.0cm、厚さ0.8cm、重量6.30g。322が長さ2.5cm、幅1.9cm、厚さ0.3cm、重量1.45g。323が長さ2.8cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm、重量1.40gを測る。材質はすべてサヌカイト製である。

324は石包丁の未製品と思われる。背部は平坦な面をつくっているが、刃部は未加工の状態である。法量は体部残存長6.7cm、幅6.8cm、厚さ0.5cm、重量39.7gを測る。材質は珪質頁岩である。

325は滑石製の双孔円盤で、法量は径2.7cm、厚さ0.4cm、重量5.90gを測る。

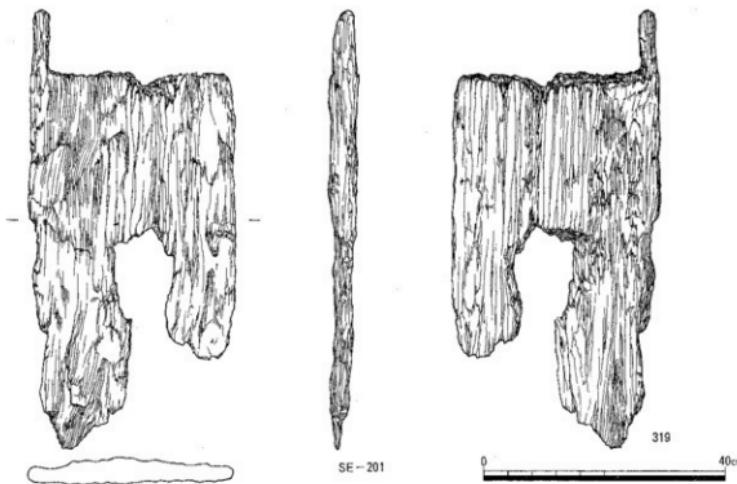
326は緑色片岩で、最大残存長13.0cm、最大残存幅6.2cm、重量383.0gを測る。石製品の原石と思われる。

(6) 金属製品（第34図）

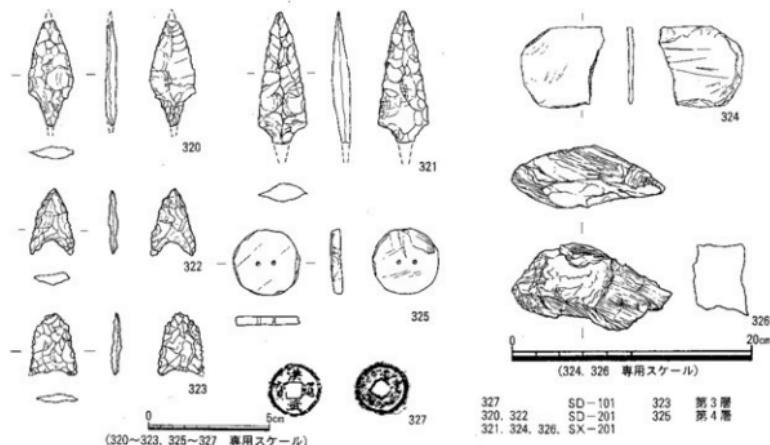
327は銭貨である。明銭の洪武通宝で初鋤年は洪武元年（1368）である。法量は径2.5cm、厚さ0.15cm、重量2.70gを測る。

(7) 動物遺体

SD-201から約8片、SX-201から約十数片、第4層から約十数片、南側側溝から1片が出土している。SX-201から出土した1点が牛の歯である他は、すべて馬の歯であった。



第33図 木製品実測図



第34図 石製品実測図・金属製品拓影

V. まとめ

1. 遺構

今回の調査では古墳時代から奈良時代に至る集落跡を確認することができた。古墳時代の集落については、初期須恵器が比較的多く出土することや、また井戸（SE-201）の検出、その出土遺物からみて、ほぼ5世紀中頃には確実に集落が成立していたことが考えられる。そして、SD-201、SX-201からは大甕など、6世紀代の遺物が大量に出土することから当該期が集落の全盛期であったことがうかがえるが、今回の調査ではその時期の集落を明確にさせるような遺構は検出されなかった。しかし、SB-102については時期の比定ができないものの、今後の調査により当該期の建物跡として捉えられる可能性はあるだろう。また、集落の範囲についても今後の調査に委ねるところではあるが、微高地から低地に移行する境を南北にSD-201、SX-201があり、遺構の検出状況、また地理的背景からみても東側に集落が展開するものと考えるのが妥当であり、今回の調査地は集落の西端部であったと推定される。

奈良時代の集落についても、古墳時代の集落とはほぼ同じ様相を示しており連鎖と集落が存続していたことを反映するものである。棟持柱を有するSB-101については、SB-102同様に時期の比定はできないが、SD-102との関連性を考慮するならばこの時期に属するものと思われる。

また、特筆すべきものとしてSI-201が挙げられる。時期的には古墳時代後期～飛鳥時代に比定できるもので、詳細は前述のとおりであるが、出土状況、またその出土遺物が移動式竈1個体分であることから何らかの思想に伴う人為的行為として考えられる。

竈には他に類竈、造り付け竈があるが、後者においては様々な祭祀的行為の痕跡が見受けられ^⑬、さらに移動式竈についても、そのミニチュア模造品が後期古墳の副葬品の中において祭祀行為の様相を示すものや^⑭、また河川や大溝からは人形、土馬、人面墨書き土器などの祭祀遺物が供伴するなど、より一層の祭祀事例が見受けられ、また移動式竈そのものについても文献史料の検討から奈良～平安時代には宗教祭祀性の高い器具であったと考えられている^⑮。これらの事実において見る限り、移動式竈は祭祀關係、非日常炊さん具に使用される特別な器種であったと評価されるものであろう。

その思想的背景としては移動式竈そのものが担っていた「清淨な火」、「神聖な火」という観念から派生する忌み的な思想も考えられるが、特に中国で成立していた竈神に対する思想、信仰が日本においても多大な影響を与えていたようであり^⑯、移動式竈が意識的に細かく壊され破棄しているかのように見られる出土例が多いことは、祓えなど祭祀の持つ意味と同時に竈神に対する恐れのためではないかという指摘もある。

SI-201の出土状況における解釈については自ずと限界があるものの、やはり竈神に対する思想、信仰、例えば竈神の祓除（上天白人罪状）などの思想的背景に伴った行為として理解することが一番妥当であると思われる。

2. 遺物

今回出土した遺物についても前述の通り、古墳時代を中心に弥生時代から中世に至るまで多岐にわたって出土しているが、特筆すべきものとして2点あった。

まず1点目は、韓式系土器が比較的多く出土しているおり、その中に鳥足文を施す土器が出土していることである。鳥足文を施す土器については田中清美、竹谷俊夫両氏により分類、分布、年代、またその社会的背景等について考察されているが^⑰、結論的には百濟地域との関連性について注目されており、

田中氏は百済の盛衰や百済と日本の交渉史をはじめ、5、6世紀の激動の東アジアの中に置かれた両地域の状況をも推察するてがかりになると結論づけている。

また2点目としては、無文の土製当て具の出土や窯の床面？が付着したと思われる須恵器及び須恵器の溶着したものの出土が挙げられる。というのも、それらの須恵器には初期須恵器の範疇に含まれるものと確認できるのもあり、初期須恵器窯の存在が推定されるからである。

現在、初期須恵器窯が確認されているのは福岡県山隈窯、同小隈窯、同八並窯、同居屋敷窯、同隈・西小田地区窯、愛媛県市場南組窯、香川県三谷三郎池西岸窯、同宮山1号窯、兵庫県出合窯、大阪府吹田32号窯、同一須賀2号窯、同大庭寺T G232号窯などがあり¹⁹、このように点在する分布状況、また当時、河内湖東岸という環境から考えてもメノコ遺跡周辺において初期須恵器窯が存在してもなんら不思議ではないもので、今回これらの関連遺物の出土により、さらに可能性がたかまつたものと思われる。

以上、2点の注目すべき遺物をあげたが、いずれにおいても半島との交流を示すものであり、今後、5、6世紀における渡来人の動向、つまり半島との政治、経済、文化など様々な交流を考えるうえで今回のメノコ遺跡の調査は多大な成果を納めることができたと言えるだろう。

註)

- (1) 分類、呼称については米田氏に準拠した。
米田敏幸「上師器の編年・1近畿」『古墳時代の研究』6 土器と須恵器 1991
- (2) 小村 浩「和象陶邑窯出土物の時期編年」『陶邑』III 大阪府教育委員会 1978
- (3) 関川尚功「奈良県下出土の初期須恵器」『考古学論叢』 梶原考古学研究所紀要第10冊 1984
- (4) 以前、この掘文については関川氏分類（前掲註3）の中での並流として捉えていたが、他に類例も少なく、省観する限りでは大庭寺遺跡で施文の方法が異なるもの同様のものを見られるのみで、他の掘文とは分類されるものであろう。
☞大阪府埋蔵文化財協会・大阪府教育委員会『陶邑・大庭寺遺跡IV』 1996
- (5) 横田賢次郎、森出祐「人宰府出土の輸入陶磁器について—型式分類と発年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集4』 1978 九州歴史資料館
- (6) 仏海和雄「近畿地方における土器製造」『考古学ジャーナル』298 1988
- (7) 勅大阪府文化財センター・大阪府教育委員会『小阪遺跡』 1992
- (8) 寝屋川市教育委員会塙山則之、濱田延光氏のご教示による。
- (9) 山田隆一「志紀遺跡で出土した「瓦貫底成」杯身」『韓式系土器研究』VI 韓式系土器研究会 1996
- (10) 初期須恵器、韓式系土器（軟質土器、陶質土器）については、以前に速報的意味において報告したところではあるが、後の検討により図面の修正、また内容についても加筆、訂正した箇所があるため、今回の報告をもって正報告としたい。
中達健一「大東市メノコ遺跡山上の韓式系土器」『韓式系土器研究』IV 韩式系土器研究会 1993
- (11) 勅大阪府埋蔵文化財協会・大阪府教育委員会『陶邑・大庭寺遺跡III』 1993
- (12) 前掲註(7)
- (13) 寺沢知了「カマドへの祭的行為とカマド神の成立」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズV 1992
- (14) 松浦俊和「ミニチュア炊飯其形土器論—古墳時代後期・横穴式石室墳をめぐる墓前祭祀の一形態—」「思想」第20号 1984
- (15) 稲田孝司「忌と竈と王權」『考古学研究』第25巻第1号 1978
- (16) 水野正好「竈形—日本古代竈神の周辺」「古代研究」24 勅元興寺文化財研究所 1982
- (17) 中村信義「竈形土器考」『播磨考古学論叢』今里幾先生占稀記念 1990
- (18) 田中清美「鳥足タキと百濟系土器」『韓式系土器研究』V 韩式系土器研究会 1994
竹谷俊夫「日本と朝鮮半島出土の鳥足形タキ文土器の諸例—その分布と系譜—」『古墳文化とその伝統』 1995
- (19) 吹田市立博物館『海を渡ってきた陶人たち』平成5年度特別展回録 1993

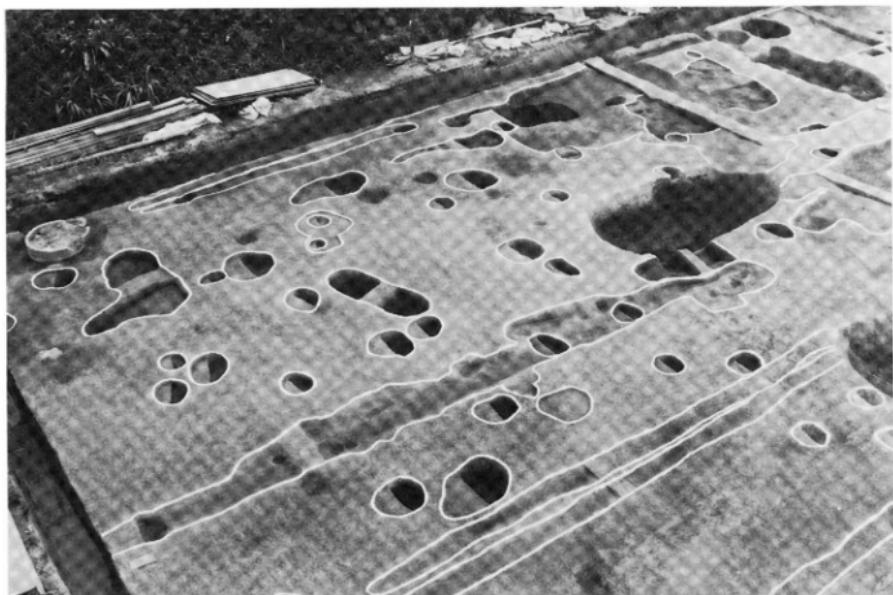
報告書抄録

ふりがな 書名	めのこいせきはっくつちょうさほうこくしょ メノコ遺跡発掘調査報告書
副書名	
卷次	
シリーズ名	大東市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第14集
編著者名	中達健一
編集機関	大東市教育委員会歴史民俗資料館
所在地	番574-0037 大阪府大東市新町13番30号 ☎ 0720-73-3521
発行年月日	1998年(平成10年) 3月31日

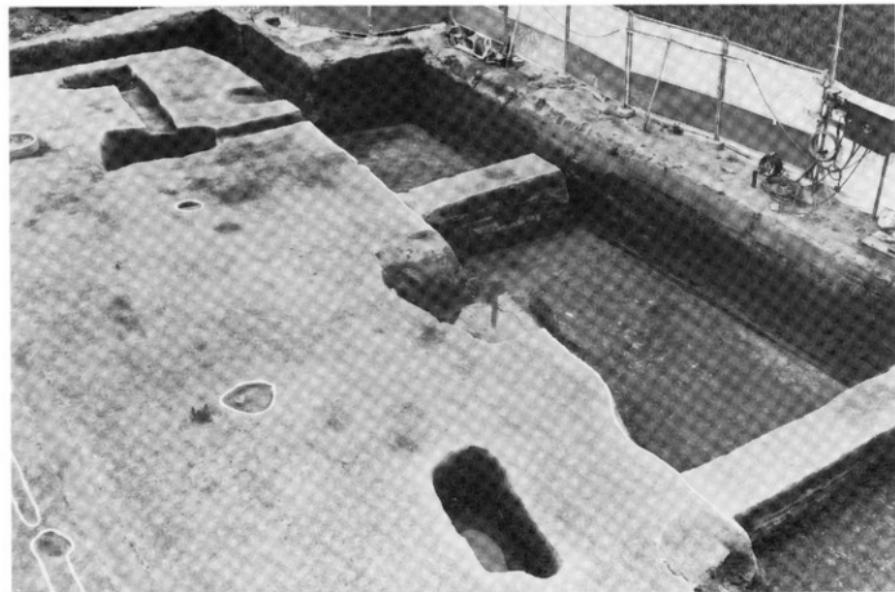
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
メノコ遺跡	大阪府大東市 野崎	27218		9	34度 42分 38秒	135度 38分 49秒	1991年 6月24日～ 1991年 8月20日	本体部分 484m ² 浄化槽部分 56m ²	社員寮建設 に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
メノコ遺跡	集落跡	古墳時代 飛鳥～ 奈良時代	掘立柱建物、井戸溝、土坑、柱穴 自然流路 落ち込み状遺構	弥生土器、土師器 須恵器、黒色土器 縄軸陶器、灰釉陶器 瓦器、輸入陶磁器 製塙土器、移動式竈 韓式系土器(軟質・陶質)、埴輪、土馬、無文当て具 木製扉材、石鎚 滑石製双孔円盤	思想、信仰に伴ったと考えられる移動式竈の出土状況 鳥足文を施す百済系土器

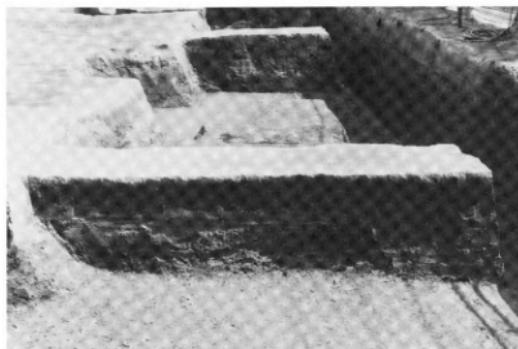
図 版



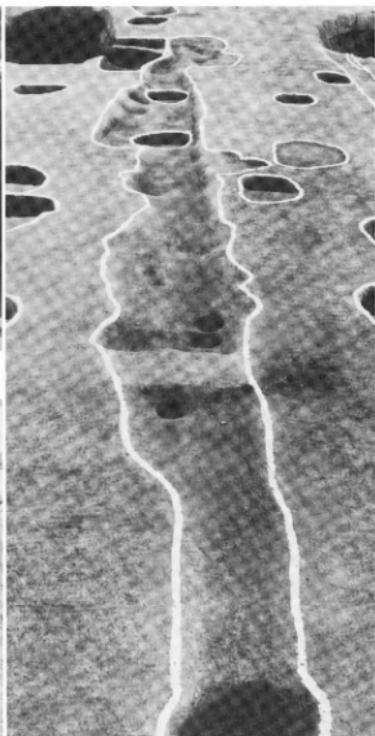
第1遺構面北東部（北西より）



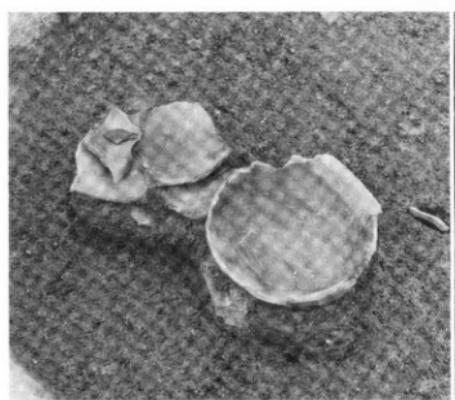
第1遺構面南西部（北東より）



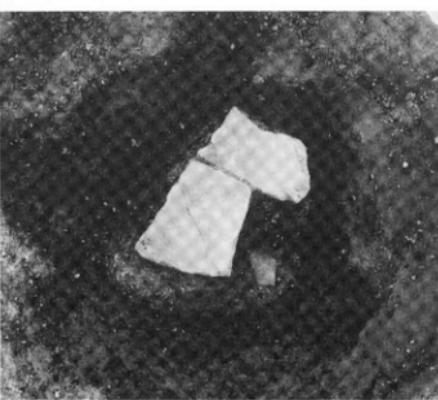
SD-101 (北より)



SD-102 (北より)



SP-103 遺物出土状況 (南より)



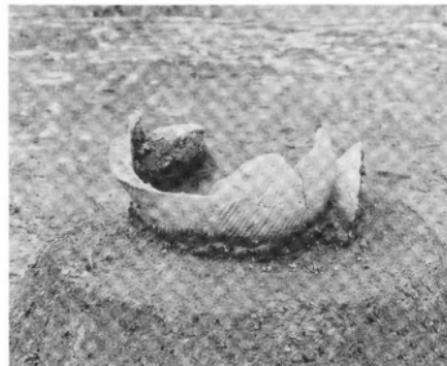
SP-106 遺物出土状況 (南より)



SB-101 (西より)



SB-102 (西より)



第4層 遺物出土状況（弥生土器 壺）



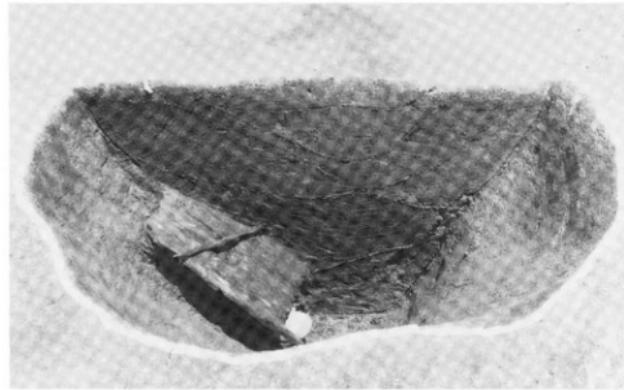
第4層 遺物出土状況（須恵器 壺）



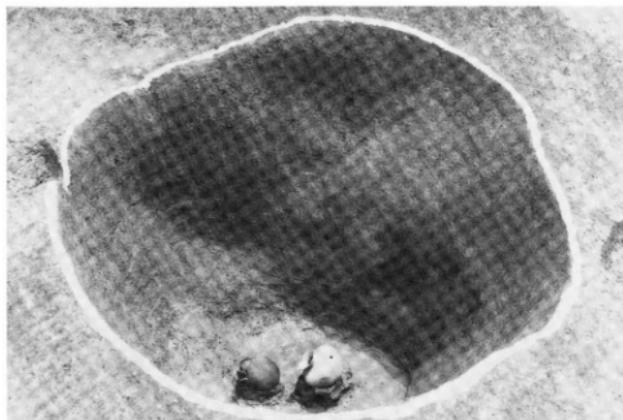
第2遺構面南部（北より）



SK-201（南東より）



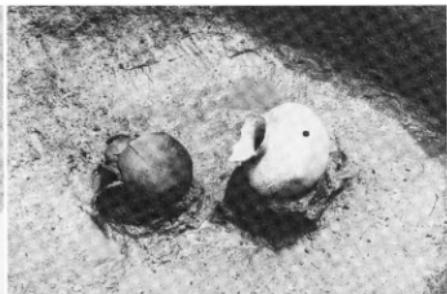
SE-201（南より）



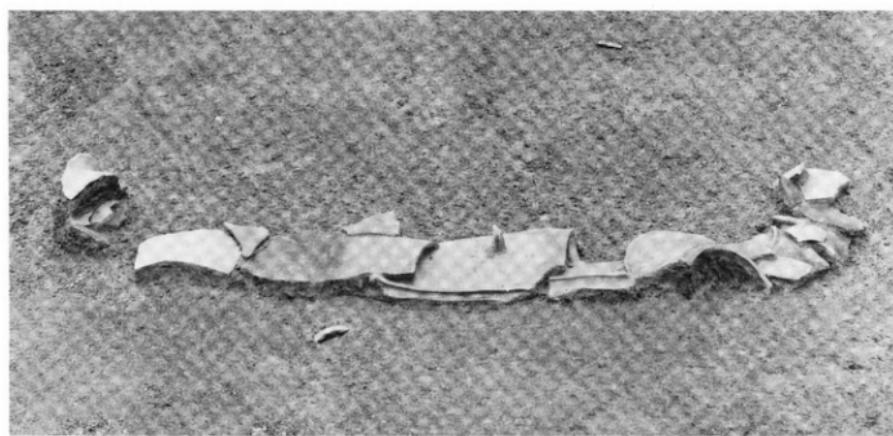
SE-201 完掘状況
(西より)



同上 遺物出土状況（東より）



同上 遺物出土状況（西より）



SI-201 (北より)



SD-201、SX-201(北東より)



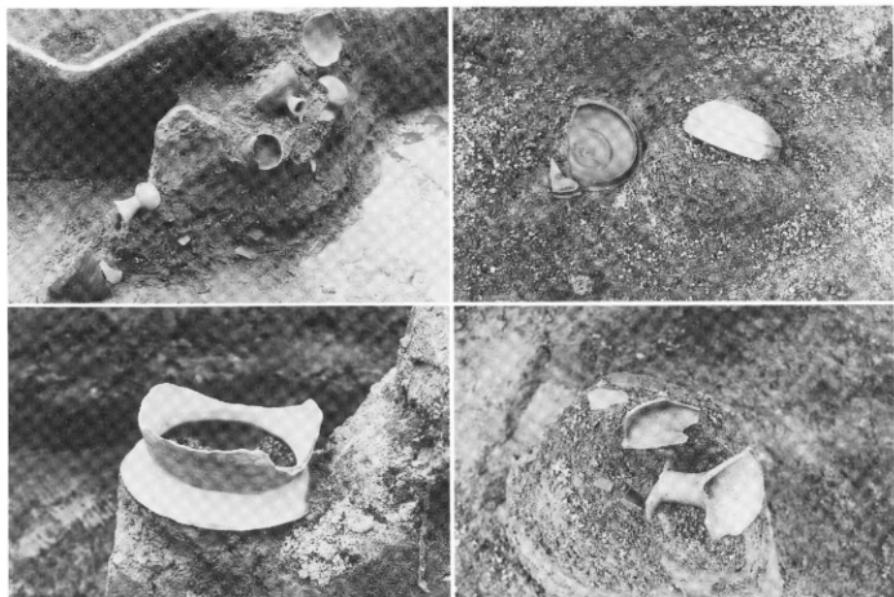
SD-201(北より)



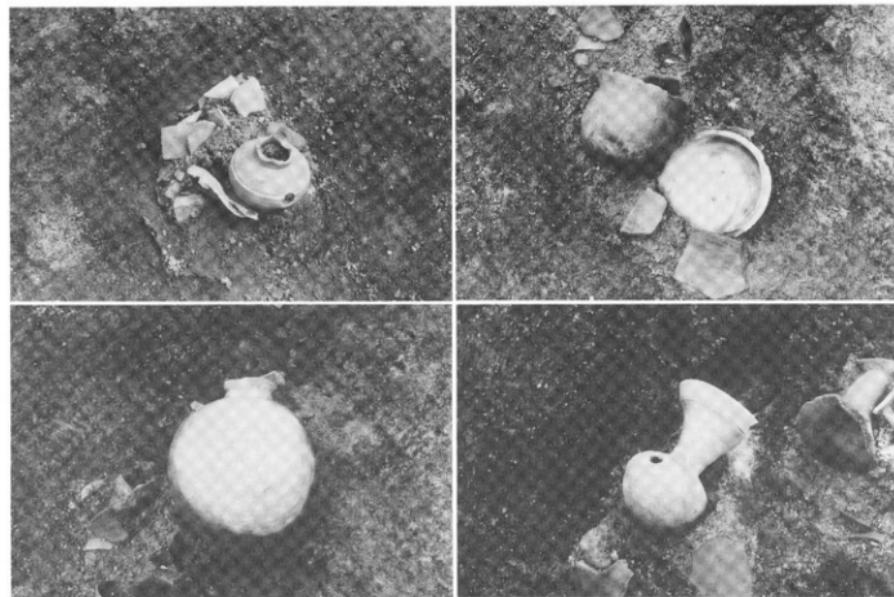
SD-201、SX-201遺物出土状況(北東より)



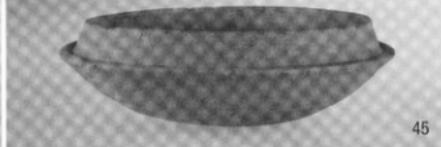
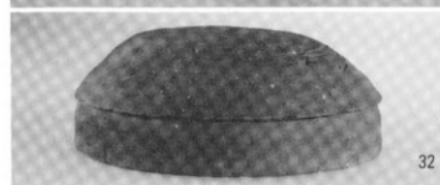
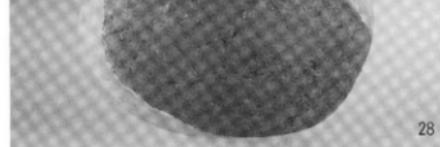
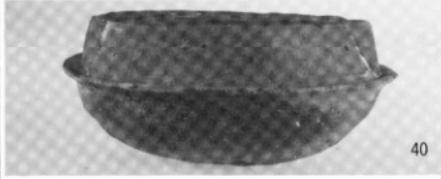
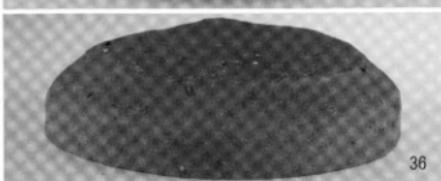
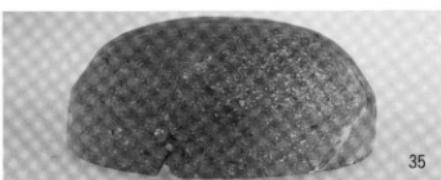
SD-201 大量出土状況(北東より)

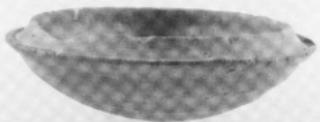


SD-201 各遺物出土状況



SX-201 各遺物出土状況





48



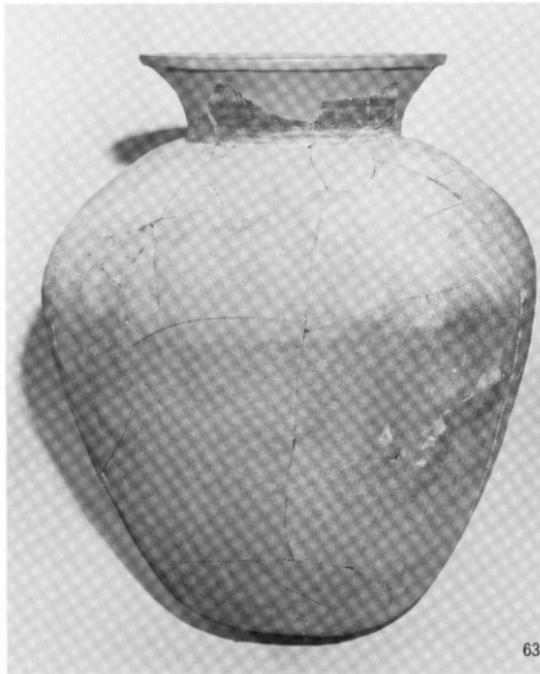
49



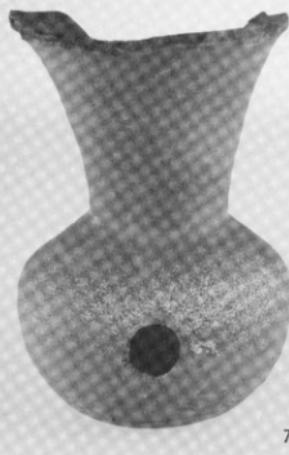
53



68

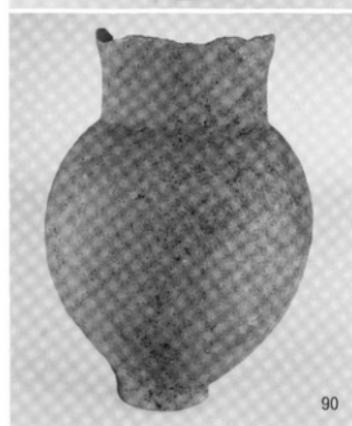


63



70

図版
10
出土遺物
(3)



図版
11
出土遺物
(4)



108



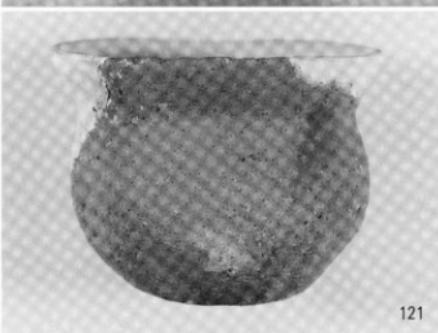
109



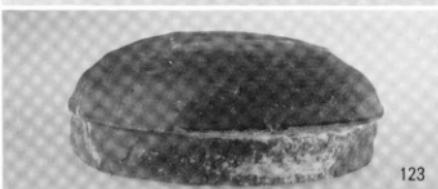
110



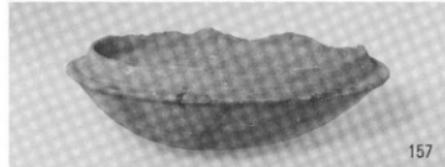
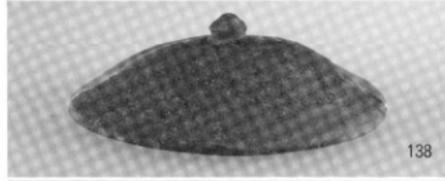
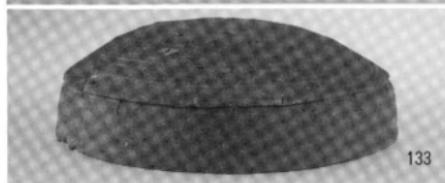
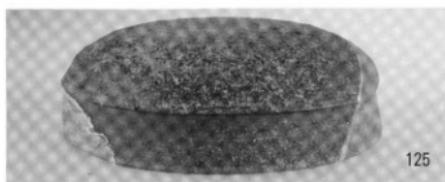
111

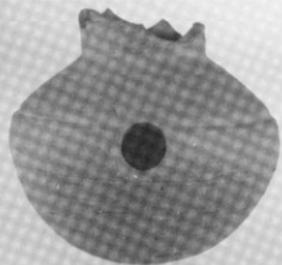
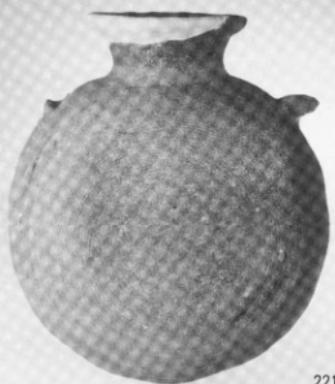


112

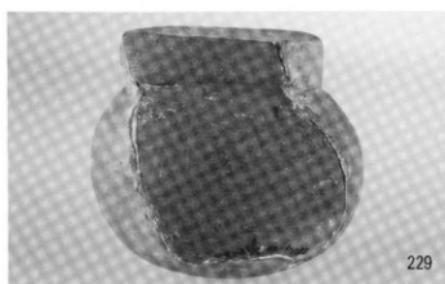


113





図版
14
出土遺物(7)



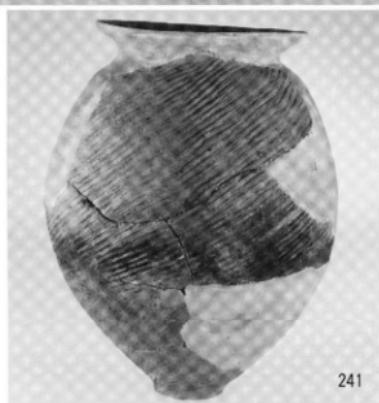
229



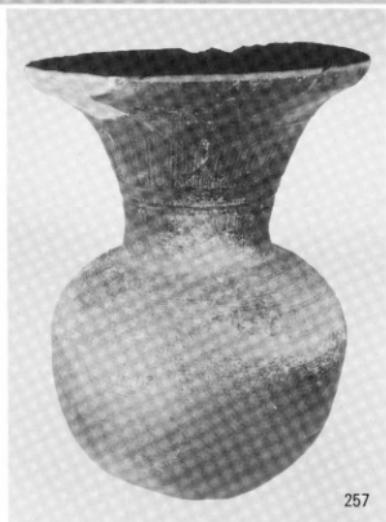
248



252



241



257



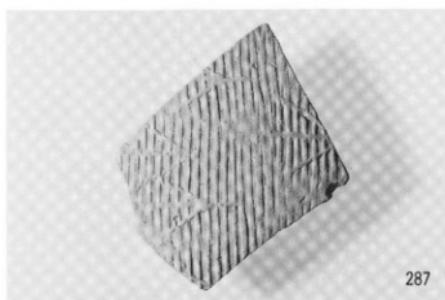
242



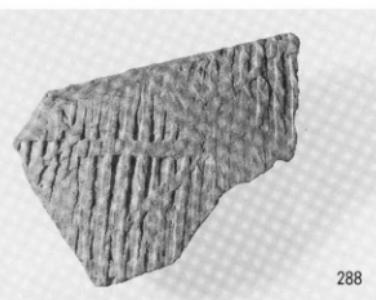
245



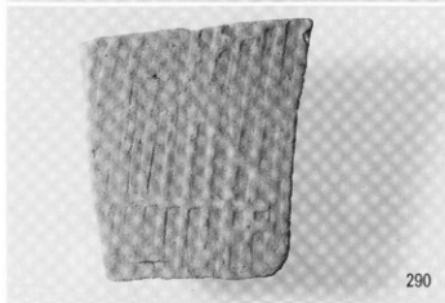
258



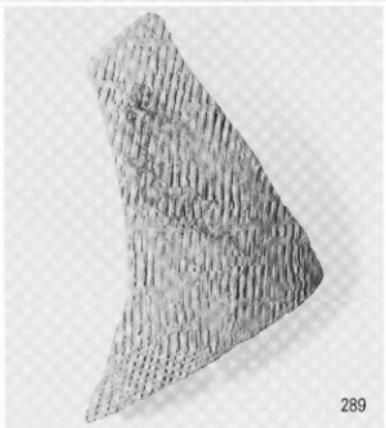
287



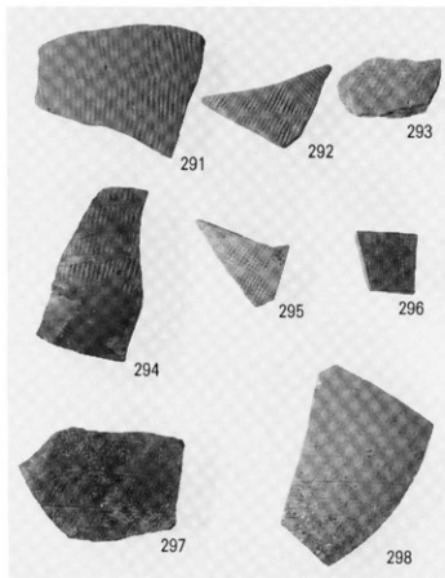
288



290



289



294

291

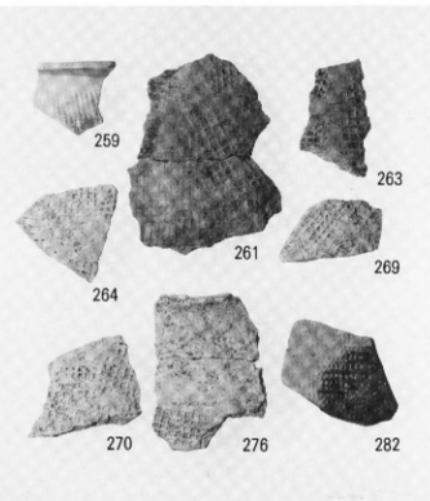
295

293

296

297

298



259

261

264

263

269

270

276

282

